
トリニティ スター

霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリニティ スター

【Nコード】

N8742L

【作者名】

霧

【あらすじ】

普通の高校生がいきなり変身！

序章 誕生の巻（前書き）

よんでね ^ - ^

序章 誕生の巻

私立三田町高等学校一年三組の教室で彼らはそう……日常とはかけ離れた世界の住人と出会ったのである。

出会うことさえ日常でないというのに、おかしな力までもが身体に宿り、いやもなしにも戦いの舞台に引きずり込まれた

不思議な魔法のような、夢か現実か、漫画みたいだなこりゃって暢気なこと思ってるのは浅見健だけだったのかもしれない。

浅見健。今日から普通の高校生……になるはずだった。

お世辞にも顔が良いでもなくスタイルも中の中。男子の中では可もなく不可もなくというところだろう。成績位はせめて上のほうへと思うところだが。たぶん中の中になるんだろそれが彼、浅見健である。

高校生活を満喫してやるんだって意気込んで晴れて入学を迎え、一年三組なるところへ配属された。

三階建ての校舎は決して広いとはいえなかったが、都会に建つせいだろうか、雰囲気も洗練され、先輩たちも垢抜けて見える。

一階の下駄箱から学食の目の前を通り、吹奏楽部の練習場となっている音楽講堂をぬけたさきの階段を二階へ上がると一年生の教室になっている。

「三組、三組……」

教室の扉の上の表示を見上げながら健は自分の教室の扉をガラッと開けた。出席番号順に座席は決まっている為、健の席は一番前の窓側らしい。小学生のころから出席番号が一番になることが多かったせいが見つけるのは簡単な席だ。

机の横にカバンをかけると隣の席に良く見知った顔を見つけた。

「よお、蘭子。また同じクラスか、よろしくな。しかも隣の席かよ」

健は机に肘をかけて横向きに座ると正面に腰掛ける中学時代からの同級生、喜多嶋蘭子へ声をかけた。

「またって、私と一緒に不満だつていうの？私だつてあんたの隣に好きですわつてるんじゃないんだから。失礼しちゃうわね！」

綺麗な黒髪のロングヘアをツインテールにまとめその結び目に紫の小さくかわいいリボンを結っている。怒ったような瞳と口をしているが、整った顔立ち。いわゆる美人である。しかし口を開けば「あんたねっ。私と同じクラスになれて、しかもあんたの横に座つてあげてるんだから感謝くらいしなさいよ」顔を真っ赤に怒っている風にまくし立てる。

「はいはい……それはいいけど、あんたつていうなよ」とお決まりの文句でせめてもの反抗してみた。

健は中学時代、蘭子に『おまえしゃべらければ美人なんだからもう少しおしとやかになつたらつきあつてやる』といった後、五秒ほど沈黙の後に耳まで真っ赤になつた蘭子にボコボコにされた。以来、蘭子にとって健は気になる存在でもあり、むかつくことこの上ない存在なのである。

高校生活初日とは思いがたい会話をしていると後ろの席にいるそれはそれは可愛い女の子、蘭子とは方向性の違う美少女

「お二人は同じ中学出身なんですか？とっても仲良しなんですね」

河野由宇が話し掛けてきた。

「私、河野由宇といいます。南二中出身です。仲良くしてくださいね」

蘭子と健は河野由宇と名乗る女の子をじーっと見つめる。

小柄で少し茶色がかつた毛色で、ボブカット、おっとりとした雰囲気眼鏡の奥はウルウルの瞳が小動物を連想させて可愛い。

しかも豊かな胸が制服の下に隠れているのである。

「あの……邪魔でしたでしょうか」

健はその愛らしい姿に思わず席を立ちあがり机に腿を強打した。

「いや、邪魔なんてそんなことないよ。俺、浅見健。こいつは喜多嶋蘭子。よろしくね」

ぶつけた太腿をさすりながらニヤニヤ顔の健の姿をみて苦虫をか

みつぶしたような顔で蘭子も

「よろしく」とひとこと愛想なく呟き、健に肘鉄を食らわす。

「ぐはっ」

「どうかしましたか？」

きよとんとした顔で由宇が呟く。

「いやいや、なんでもないっす」

蘭子め、覚えてると思いつつも口には出せずその場を取り繕う。
「ったく……デレデレしてなさけないったらないわね」ボソッと
蘭子の口が動いたのを健は見逃さなかった。

教室の窓からはテレビ塔がそびえたち、教室を見下ろしている。
坂の上の隣は小学校、反対側の隣は総合病院が建ち並ぶ。

大使館やら高級マンションやらも近所にあつて、高校という環境
っぽくないのがいい。

健がこの学校に決めたのには大きな理由があるのだ。それは、健
の胸の中にひっそりと秘密としてしまつておく事になっている。

タイミングがいいのか悪いのか、和やかな雰囲気？を迎え未だ聞
きなれないチャイムが鳴り担任らしき先生が教室へ入ってきた。

「おはようございます」

なんともしゃっきりしない先生だなどクラス全体が気が抜けた感
じでざわめく。

そのざわめきとぼぼ時を同じくして『ガガガガガッ』耳障りな
ラジオのチューニングが合っていないようなノイズが健たちを襲つ
た。

「うわ！」

「え！」

「きゃ！」

健、蘭子、由宇だけが同時に叫び、周囲を見渡す。

時が止まっている……三人以外の時が。

灰色空間に取り残され、クラスメイトは身動き一つしない。まる
で蠅人形になつてしまつたかのごとく。

何か恐ろしい事が起きているのは肌で感じる事ができるが、三人は恐怖を感じるでもなく、言葉を発する事もなく、教室を飛び出した。

使命感に追われるように、三人は廊下を走り階段を下りる。吹奏楽部の練習場となっている音楽講堂をぬけて、学食の目の前を通り下駄箱にたどり着く。

その間、不思議と誰も何も会話することがなかった。とにかく校庭へ出なくては、という思いだけが三人の頭の中にめぐっていたのである。

ここまで来て、由宇が初めて言葉を発した。

「なに、これ……」

由宇の小柄で少し茶色がかった毛色のボブカットが光を放ち薄い蛍光色のブルーに輝き始め、肩には黒いマント、手にはタクトのような杖を持っている。まるで魔法使いのように……。

「かわいい……」思ったまま健が呟くと、隣にいた蘭子から肘鉄を食らう。

「ぐはっ」

その瞬間、蘭子の身体から真紅のオーラが光り輝き、炎に包まれた。

「わ、わたしも……」

ツインテールにきれいにまとめた髪の毛がふりほどかれ、腰まで届く。肩には真紅のマント、手にはフェンシングで使われるような細い剣とひし形の小さな盾が握られている。

「か、からだか……熱い。あたしの中に何か大きな力が入ってきた感じだよ」

蘭子の瞳が力強く輝きながら、まるで決められたかのようなポーズを決めた。

「馬子にも衣装だな」

「なによっ」

「ぐはっ」

そろそろ、わき腹も真面目に悲鳴をあげそうな勢いで肘鉄を食らう。

一人、健だけはいまだ姿はかわっていないが、行かなければいけないという気持ちで三人を急がせる。

変身を遂げた二人は空を舞うように校庭に踊り出る。…が健は必死に走る。

やっとの思いで健が校庭に出てきた時には、夢か？なにこれ？普通の高校生活には有り得ない光景が広がっていた。

学校の空一面が、夜とも昼ともいいがたい灰色に覆われ、校庭の隅にある体育館から黒い煙が噴出している。

その黒は、この世のものとは思えないような黒ですべてを吸い込んでしまいそうな黒だった。いや、周囲の木々や校庭の土サツカーゴールなど事実吸い込まれていた。

不意に爆発が起きる。

その煙幕の中から、冷やかなこの世のものとは思えない笑みを浮かべながら黒いオーラをまとう人がたっていた。

「幽玄界……からの使徒」

健は口を開く。

「ってか、なんで俺わかるんだ？」

「知らないわよ、でも私も感じるわ。健、行くわよ！」

蘭子の声に誘われ、健は白銀の炎を放ち宙へ舞う。

「うおおおおお！あちちちちち！！」

「バカいってないで早くついてきなさい！」

蘭子に振り向きざまぐーで殴られ、自らの装いの変化に少し戸惑う健。

その手には身の丈程の大剣、背には白銀のマントを背負い、大剣は銀色の炎に包まれている。両翼から健と蘭子が黒の使徒へと切り込んでいく。

健の頭上には由宇が呪文を唱えながら浮遊している。

「私はヒーラー。蘭子さん、健さん。あなた達を守護、回復する

役目みたいです」

由宇は宙に浮かびながら二人を見つめ

「まかせて」

と呟いた。

何もかもが夢でも見ているかのような出来事。

しかし、不思議と恐怖は感じる事が無いのだ。

「いつくぞー！」

「っしやー！」

「ん…」

三人は黒いオーラを放つ謎の人影向けて走り出した。……一人は浮遊しているのだが。

トリニティスターの誕生の瞬間であった。

第1章 門番ミユウ（前書き）

新しいキャラクターが続々登場してきます
おたのしみに^^

第1章 門番ミユウ

「ふあゝ」

まだまだ眠い目をこすり、今日の授業の時間割を考えながら学校への道のりを急ぐでもなく歩く。

春の景色といっても街の中、それもどちらかといえばオフィス街にこじんまりとある学校なので、春らしさといえはせいぜい新卒サラリーマンが着慣れないスーツで研修にでも行くのか群れをなして歩く姿くらいだ。

そのサラリーマンの群れをかくぐり小さな商店街を抜けると某一流大学のキャンパスにぶつかる。

にぎやかで楽しそうにのんびりすごす大学生をうらやましげに横目に見ながら坂を抜けるとわれらが私立三田町高校なのだ。

「おはよー」

「ん、おあよ」

無駄に元気な蘭子が後ろから走ってきた。

「遅刻するぞーいつそげー」

風のように健を追いつき、追い抜いていく。

追い抜き際にカバンで頭をバンツとなぐられる。

「いつてー、なにすんだよ」

中学時代からこの光景だけは変わらない。蘭子の日課ともなっている。

「あと三年間、またこの痛みに耐えるのか……赤点とつたら蘭のせい決定だ」

後頭部を抱えながら道端にしゃがみ込む健。

「馬鹿なこと言っただけで急ぎなさいよーじゃねー」

走り去る蘭子の後姿は、どんどん小さくなりあつというまに坂の上の校門にたどり着いた。

健がふらふら坂を上り始めたときには、チャイムが鳴り響いてい

た。

「蘭のせいで遅刻だ」

トロトロ歩いていた健のせいなのだが……。

出席番号一番の健は、当然だけど一番最初に出席をとられるのだ。HRが始まり先生がくる前に座っていないと遅刻なのだが、出席番号が後ろついていいなと理不尽な事を考えつつ教室に入る。

後の扉ろから入ったとしても、どうせ一番前の席で窓側なのだから遅れると激しく目立つ。漫画のようにこっそりと匍匐全身しながら席までたどり着いたとしても、冷やかな視線は否めない。

なので、堂々と前の扉から入ることにした。

「あさみ……いい度胸だな遅れて分際で堂々とはいつてくるとは」

「す、すいません以後気をつけます」

担任に出席簿で頭を叩かれる。

登校時に蘭子にカバンで叩かれ、そして遅刻で担任に叩かれ……。小さくなりながら自分の席についた。

「結局遅れてんじゃん。目覚ましてあげたのに」

蘭子は机に肘の上に顔を乗せ鼻と口の間にシャーペンをはさんで意地悪そうな顔つきでつぶやいた。

「蘭のせいでしばらく動けなかったんだよ」

頭をさすりながらにらみつける。

「うーそばっか、あんたがトロトロ歩いてるからじゃんね。少しは反省でもしてなさい」

まだ顔と名前も一致しないクラスメートばかりだが、これで健だけは名前と顔はばっちり覚えられたはず。と納得しようとしてみるが今ひとつ釈然としない。

授業も上の空で、英語の時間に世界史の教科書を広げてまたまた失笑を買い、体育の時間には運動着を裏表逆さに着て爆笑を買った。
「健、あんただいじょぶ？ あたしがカバンで頭殴っておかしくなっちゃったかじゃないわよね」

「ほんとですよ……こないだの浅見さんはすごい素敵だったのに」

本気が冗談か由宇にいわれると思いつきり鼻のしたがのびてしま
うらしい。

「ばかつデレデレするんじゃないわよ」

蘭子の回し蹴りが後頭部に炸裂した。

「ぐあ、なんで蘭が蹴るんだよ。しかも朝と同じところを……俺
の頭はサッカーボールじゃないっての」

「シャキツとしなさいよ まだ寝ぼけてるんじゃないの？」

昼休み、学生はそれぞれグループにわかれながら昼食を取る。学
食組もいれば弁当組もいて、窮屈な勉強からほんの一瞬解放される
ため一番にぎやかな時間だ

隣にそびえたつ大学の学食のカレーライスが有名で、こつそり忍
び込む輩もいるらしく、大学の学食の入り口には「三田町高校生 &
犬お断り」なんて看板もでていたりする。

そんな中、三人は教室の片隅の自分の席で女の子二人はお弁当、

健はコンビニでパンやらおにぎりやらを広げていた。

「こないだのことなんだけど……」

「なにさ？」

「そうそう、私も話したかったんですよ。あんまり突然だった
し、何かなにやらさつぱり」

由宇が後ろから二人に割り込んできた。

「いろいろ考えたんですけどね、私達三人にそれぞれ役割みたい
なのがあると思うんですよ。たとえば私だったら攻撃的なことは殆
どできないみたいです」

「そうよね、私なんかレイピアもってたし健なんか体より大きな
剣でしょ。あれは笑えたわーふらついてるんだもんね もっと体鍛
えなさいよ」

「でもかつこよかったですよ 浅見さん」

蘭になじられ由宇に誉められ複雑な顔をしながら

「もつと根本的におかしいと思わないか？なんで俺らがあんな事
にまきこまれなきゃいけないとかさ、その前に夢かなんか見させら

れるんじゃないかとかさ普通じゃないだろうと考えてもさー」

「いいじゃんべつつにー刺激的な高校生活になりそうでしょ。この世の中は不思議がいっぱいな。何があったってそれが常識だと思えばいいのよ」

「そうですよ、私はこんなに早くお友達ができたからとっても嬉しいんです」

健の最も至極な疑問を女性陣二人は軽く一蹴し、きゃあきゃあ盛り上がり始めた。よろめきながら健は教室をでていく。

あの日以来、特別変わったことは何も起きてない。実際あの日だって「幽玄界の使途」と健はつぶやいたものの何者かさえもしらなかった。

黒「悪と勝手に決め付けて戦って勝利したものの本当に悪者だったのかもわからないのだ。

自分達の変身もどうしたら変わるのかわからない、あの後、何度も変身しようとしたけど全く変化なしなのだ。

蘭子や由宇のように暢気に騒ぐ気分にはなれない。

「どうなっちゃんたんだろうな、俺」

「幽玄界ってどこだよ、ここはなんて名前の世界なんだろうな」

ブツブツつぶやきながら屋上に向かう階段を上っていると、屋上への扉の前にクラスメートらしき人影が健を待っていた。

柴田雄二

ひよろつと長身であるが精悍で強面、目つきも鋭くクラスの中では無口で一匹狼タイプである。

「現有表層世界といって幽玄界とは隣り合わせになってるのです」

「へ？」

健が巢頓狂な声をあげる。

「信じるも何も君達はもう見てきたはずですよ。見ただけじゃなくて、選ばれた戦士じゃないですか」

涼やかに語り始める。

「人はこの世界で生を終えると魂が隣の世界へ移動する。そこで

は今見ている世界となんら変わりのない世界なんです」

「それって幽霊ってことだよな」

健は恐る恐る聞き返す。

「そう、そういう風にこの世界では呼ばれていますね」

屋上へでて空を見上げながら柴田は言う。

「その世界が幽玄界、普通ならばこちらの世界には干渉しない。

しかしこの町のこの学校付近のあるポイントと幽玄界の位相にずれが生じて限りなく近づき、そして繋がった」

「それでこないだの事件と関係が？」

「大有りですね」

「君達が現有表層世界と幽玄界との位相のずれに反応し、君達の性格、資質が伝説の戦士という姿で現れたというわけです」

「伝説の戦士……」

「そう、実は僕も驚いているところさ 繋がった扉を閉ざすために僕はこの世界にやってきたんですが…… まさかトリニティスターが顕現するとはね」

二人が会話をしている間、蘭子と由宇も屋上へやってきていた。

健がフラフラと歩き出したので夢遊病にでもなったのかと心配で追ってきたのだ。

「僕には戦闘能力はないんだ。だから君達が使途の足止めをしてくれると助かる」

「いつでも変身できるってことですか？」

由宇が不安そうな顔つきで言う。

「いつでもというわけではないと思う、使途があらわれれば必ず変化はあるはず」

「そうなんだ」

蘭子は目を輝かせて

「体が勝手に動くからだいじょぶよ」

「たしかにな」

「健は大きな剣に振られてたけどね」

「くす」

「うるさい！俺だってあんなでつかいもんふりまわすなんて思わなかったんだよ」

「ちよつとは体力つけときなさいよねー」

柴田は微笑みながら

「二つの世界の歪を修正さえすれば全て元にもどる 頼むよトリニティストアー」

「おう」

「まかせて」

「がんばります」

力強い味方の登場に勇気づけられた健。

「お化けだらうが幽霊だらうが使途だらうがなんでもいいや、いつでもかかってこいやー」

「調子に乗るんじゃないわよ」

蘭にもついていた弁当箱で後頭部を殴られる。

「うお！今日三回目だつてば後頭部……」

「だいじょぶですかあ」

由宇が頭をさすってくれた。

ピキッ

その姿に蘭の中で何かが壊れていく……

「けーんー」

「ん？何？」

「えいやー」

ボコッ

蘭のグーが健の顔面にヒットした。

「きゅー」

健の目が@マークのようになり鼻から暖かく赤い物が滴り落ちる。

「わ、わ、わ」

由宇は慌ててハンカチをとりだすとそのハンカチを蘭がとりあげ健の鼻に突っ込む。

「洗って返すからね、あ、汚いから健に新しいの買わせて返すわ」
蘭が引きつった笑顔で由宇のハンカチを振る。

「ふ、じゃれあってる場合じゃないみたいですよ」

柴田が見つめた雲の切れ間から紫色のモヤが湧き出ている。

「ガガガガガッ」ラジオのチューニングの合っていないようなノイズが走る。

「頼みましたよ伝説の戦士、トリニティストアー」

柴田は宙に舞い上がりふっと姿を消した。

「由宇ちゃん、いきましょ」

「え、で、でも浅見さんが……どうしましょう」

健は目を回したまま遠い世界に旅立ってしまっている。

「気が付いたら追いかけてくるわよ。今はあっちが優先じゃない」

「そうですね、わかりました」

健は由宇の腕から放され屋上のコンクリートに今日四回めの後頭部を打ち付けられた。

「きゅー」

「きゃ……だいじょぶかなあ でも行かなきゃですね」

由宇の小柄で少し茶色がかった毛色のボブカットが光を放ち薄い蛍光色のブルーに輝き始め、肩には黒いマント、手にはタクトのような杖を持っている。まるで魔法使いのように……。

蘭子もツインテールにきれいにまとめた髪の毛がふりほどかれ、腰まで届く。肩には真紅のマント、手にはフェンシングで使われるような細い剣とひし形の小さな盾が握られている。

蘭子は真紅のオーラをまとい

由宇は空色のオーラをまとい紫のモヤへ向かっていった。

「由宇ちゃん援護頼むわね」

「はい、蘭子さんも無理しないでください」

空の一部の亀裂から湧き出ていたモヤが突然ぶわっとふきだし亀裂を大きくする。

そこから現れたのは巨大な蛙に似た人形であった。

「ちょ、蛙苦手なのにー」

「気持ち悪いです……」

二人が躊躇する間に学校のグラウンドめがけて蛙の人形の姿の使途はダイブする。

そこには時を止められて動けなくなっではいるが、昼食を取っている学生達がいるはずだ。

「だめーそちにいかないでー」

由宇が泣きながら叫び、杖を大きく振った。

その杖は空色の大きな光を発し蛙の人形を包み込むと落下を防いでいる。

「ぶもー」

不気味な声をあげながらもがく

「蘭子さん……あまり長く持たないかもです重たくて、は、はやくあいつを」

「わかった、いくわよー覚悟しなさい！」

レイピアを天にかざし、真紅の光を放つと体全体をスクリューのように勢いよく回転させ蛙人形に向かって飛んでいく。

真紅の光の矢となった蘭子は蛙人形のど真ん中を撃ちぬきお腹に大きな穴を開けた。

「ぶもー」

力なく叫ぶ蛙人形は目の輝きを失い紫の煙を腹に開いた穴からふきだしながらもがいている。

「やった」

蘭子は大きくガッツポーズをとって勝利を確信した。

しかしその直後、由宇の力も限界だったのか支える力を失ってしまった。

「だめ、蘭子さん下にまだみんなが……」

もがきながらグラウンドに向かって落ちていく蛙人形。

このままだと皆下敷きになってしまう。

「きゃあーだめー」

由宇が泣きながら叫ぶ。

「ちょ、やばいつて由宇ー」

蘭子が蛙人形に向かって再びレイピアを向け、空を翔る。超人並みの速度だが、重力に任せて落ちる蛙人形にはかなりの距離があり間に合いそうに無い。

由宇の背後から銀色に輝く塊が、光の矢のごとく蘭子と蛙人形の間に飛んできた。

「待たせたな、お前ら後で覚えとけよ」

「いやらしい顔してイチャついてたから……つい、ね」

「私なんかわるいことしたんですか？」

「グーで殴るわ、地面に叩きつけられるわで、赤点とつたらお前らのせいだかなー」

状況は逼迫しているのだが、恨み優先なのか一通り文句を言う。

「そんなことより、ね」

「そうですよ、はやく！浅見さん」

「わかったよ、っしやー！」

健は身の丈ほどの大剣を両手でがっちり握り締めると、大きく振りかぶり標的めがけて叩きつける。

どかーん、と大きな破壊音とともに蛙人形の使徒は姿を紫の煙に変わり辺りに霧散した。

「やったー」

由宇は空から健にむかつて飛び込み、抱きついた。

「い、いや、あ、あの、ちょ、む、む、む」

由宇の豊かな胸が健に押し付けられ、顔を真っ赤にさせ、由宇の背中に手をまわそうか悩みながら両手をワキワキさせている。

「けーんー……」

先を越された感のある蘭子が、指の骨をボキボキ鳴らしながらゆっくと近づく。

「ん？何？」

健が顔を上げた瞬間

「えいやー」

ボコッ

蘭のぐーが健の顔面に再びヒットした。

「きゅー」

健の目が@マークのようになり鼻から暖かく赤い物が滴り落ち、遠い世界に逝ってしまった。

「ら、らんさん」

由宇が泣きそうな顔で

「ごめんなさい、私感情高ぶるとつい抱きついちゃうみたいで…」

…」

「いいのよ、こいつが悪いんだから 由宇ちゃんも気をつけないと何されるかわかったもんじゃないからね」

「は、はい、でもこの後どうしましょ」

さっきの事を思い出しながら、手を離すのをためらう由宇。

「いきましょ」

蘭が強引に由宇の手を握り校舎へ向かって歩き出す

「お腹すいちゃった、お弁当の続きしましょ」

「あ、はい」

二人はつぶされたゴキブリのようになった健を置き去りにし談笑しながら歩いていった。

幽玄界の使徒を無事滅することに成功し周囲は何事もなかったかのように学生達でにぎわっている。

校庭に仰向けに倒れ、忘れ去られている健が活躍したことは誰も知らない。

一年三組の午後の授業は英語と古典だったが、健は放課後まで目を覚まさなかったため、欠席になったようだ。

蘭子も由宇も放課後まで健のことはすっかり忘れていた。

「伝説の戦士トリニティスターが現れたと……」

現有表層界の隣、隣とは言っても人間達は訪れることも見ることも

もできない幽玄界の天空に、おどろおどろしく浮かぶ宮殿の一室からこの世のものとは思えない声を発する者がいた。

「はい、ルシフェル様。生みの闇神へケトを送り込んだのですが我らが同士の種を植え付ける前にトリニティスターに滅ぼされてしまいました。まさか奴らが顕現するとは予想していませんでしたので……申し訳ございません」

ルシフェルと呼ばれる闇の天空城の主は、大きな鍾乳洞の壁の一部からギロリと睨み付ける。

その姿は妖しく黒く光り、大きな翼が三枚と水牛の顔を持ち手足の鉤爪はマンモスの牙のようである。

壁画のように姿は見えるのだが咆哮するたび城全体が揺れる。

「よい、しくじってしまったものは仕方あるまい……しかし、次は許されまいぞ」

「わかつております。この闇のラウムの命に代えても幽玄界の種を植え付けてまいります」

「うむ」

貴族のような身の振る舞いのこの男、ラウムは黒のタキシードに身を包み、肩にカラスを乗せ、一見すると人間のように見える。

幽玄界王ルシフェルの側近、幽玄伯爵ラウムである。

「門番のミュウしか気にする必要も無いと思っていたせいか、ヘケト単体で送り込んでしまった。トリニティスターがいるとわかったならば、やつらに対抗できるものを連れて行かねばなるまい」

「しかし、一度にクリムゾン、アージェント、キュアが顕れるとはな……これは少し厄介なことになりそうですね」

ラウムは肩に乗せたカラスに話しかけているような口ぶりで宮殿の一室から出て行く。

ミュウとは柴田雄二の事であり、門番のような存在に位置しこの世とあの世のバランスが崩れないように見張る役目なのだ。

クリムゾンは真紅の蘭子、アージェントはシルバーの健、キュア

はヒーラーの由宇のことである。

三人それぞれの性格、資質がトリニティスターとして顕現し魔能力を持つことになったのだ。

隣の世界でのやりとりとはよそにこの世の平和を謳歌する健達三人。

蛙人形の使徒はヘケトと呼ばれ卵を人間の身体に生みつけ人間の心のエネルギーを餌にし増殖していくのである。

卵から孵ると人間は全ての生気を奪われ、代わりに幽玄界の使徒が増えていくという仕組みだ。

計らずして、三人はヘケト退治することに成功したが油断のない状況であることには変わらないのである。

「……というわけなんですが、理解していただけましたか？」

雄二は三人に幽玄界と彼らトリニティスターなどいままで疑問に思っけていても知りえなかった事を一通り説明することになった。

昨日の出来事となった蛙退治の詳細を雄二に報告し、また何が自分達の周りで起きているのか聞き出すべく、三人は、昼休みに雄二を捕獲、屋上へと拉致を敢行したのである

そこで、色々話を聞くのであるが非日常が過ぎるため、健の頭脳では理解しきれない。

「えーと……蘭子がクリムゾンで由宇ちゃんがキュア、で、俺がアージエントってわけだ。そしてそれぞれ得意な属性があるってことだな」

「そうです」

健が額に人と刺し指をつけながら、いかにも考えてます風な姿勢で答えた。

「一言で言えばみなさんの性格と人間としての能力、資質などで能力に差異が出ていると思ってもらえばいいと思います。人間にもオーラというものがあるんですが、それぞれみんな違う強さの違う色のオーラを発しているんですよ」

「あ、それなんとなくわかります」

水筒から麦茶をみんなに注ぎながら由宇が口を開いた。

「蘭子さんてまっすぐで情熱的でなんとなく赤いイメージがあるなって初めてあったとき思ってたんですね」

「そなの？あたしってそんなイメージなんだ」

蘭子は弁当箱の卵焼きを箸でつきさし、ひょいっと口へ運びながら少し照れた風に答えた。

「そう、それぞれ人間の持つオーラは能力として何かを発揮させるものではないのですが、心の奥に秘めている情熱の強さや心の芯の強さなどと同期して大きな力になることがあるんです。そしてそのオーラの力のバランスと相性がぴたり合った三人が顕れるときトリニティストアーとなるのです」

空を仰ぎ、両手を広げて雄二は熱く語る。

「よくわかんないんだけど、これからもちよくちよく敵がくるかもしれないってことよね？そしたらまたやつつけばいいんじゃない！」

腰に両手を当てるツインテールをなびかせながら蘭子も得意げな顔をする。

「そ、そんなあ…昨日だってやつとの思いでやつつけたのに、これからもあんなのがいっぱい出てきたらって考えると」

由宇が顔を両手で覆いながらいやいやをし、身体を横にゆするたび由宇の胸元から大きなアレが揺れる。

「だ、だいじょぶだよ。またあんなのが出てきたら俺の銀色のでっかい剣でやつつけばいいんだろ」

健の雄弁さとは裏腹に、眼差しは由宇の胸に釘付けだ。

勿論、蘭子は見逃さない……。

「けーんー」

「ん？何？」

にこやかに呼びかけると、健は蘭子の方へと振り返る。

蘭子の固く握られた拳が目に入ったとたん、しまったという顔をし、ディフェンスしようとするが間に合わない。

「えいやー」

ボコッ

またしても顔面に蘭子のグーがヒットする。

生温かい赤い雫がぼたりと屋上のコンクリートに滴り落ちる。

「きゅー」

悲しいかな健は、本日三度目の遠い世界へ旅立っていったのである。

「あー、またやっちゃったんですか蘭子さん」

由宇が叫びながら健へ近づこうとする。

「う、うん……つい、健みてるって叩きなくなっちゃうんだよね」

少し顔を赤らめながら、由宇を見る。

「由宇ちゃんがそんな反則的な胸してるからいけないんだよ」

「え？そ、そんな……わたしのせいなんですか……」

「あ、そんなつもりじゃないんだけど、こいつがデレデレ鼻伸ばしてる姿みちやうと無性に腹が立つわけで……」

「あの、蘭子さんは浅見さんのこと」

「え？うそ？そんなんじゃないってば、中学からの知り合いだし、家が近所なだけでべつに何もなかったしそれに……」

取り繕う蘭子は耳まで真っ赤に染まっている。

二人のやり取りを横目に雄二は教室へと足を向けながら

「ほんと仲がいいんですね、みなさん、私はこの何百年間ずっと境界の門番だったから仲間なんていなかった。うらやましいかぎりです。」

ポツリとつぶやき屋上からすっと姿を消した。

蘭子と由宇の問答は昼休みが終わるまで続き、健もまた、昼休みが終わるまでのびていたのであった。

第2章 カ才と蘭子（前書き）

蘭子の危機！

第2章 カオと蘭子

ヘケトとの戦いの後、数日は穏やかな日が続き、健達三人も普通に高校生活を楽しんでいた。

放課後の下駄箱近くの音楽講堂では、吹奏楽部の新入生だろう、金管楽器のマウスピース口にあててぶーぶー音を出す練習をしている姿や、腹式呼吸の練習なのか一年生らしき数人が「はっはっ」と発声練習

をしている。校庭では素振りに勤しむテニス部や、ひたすら奇声をあげながらダッシュ&タックルを繰り返すラグビー部など都会の狭い校庭のわりには活発な部活動が行われていた。

「なんか部活でもはいるのかな」

テニスコートでの素振りの姿を金網越しに眺めながら健。

「テニスが目的じゃなくて女の子のパンチラが目的でしょ。どうせあんたは」

蘭かが健の首を猫のようにつまみあげラグビー部の方へ向きを変えた。

「ラグビー部なんかいいんじゃない？男らしさ満点よ」なんなら由宇ちゃんと私でマネージャーで入部してあげてもよくてよ」

「ばか、よせやい。なんであんな汗臭いスポーツなんかやるかよ。男同士でぶつかりあうなんてじゃうだんじゃありません」

健は手をヒラヒラ泳がせながらその場から逃げ去った。

「水泳部でもけんがくしてこよーっと」

「女子の水着目当てでしょー!!」

「正解」

この学校は温水プールの施設が整っているため、一年中水泳部は活動しているのだ。当然体育も一年中水泳があるらしい。

「もう、勝手にしなさい。水泳部でも水着部でもなんでも入れればいいじゃない。まったくもう」

「あの、水着部なんてないんじゃない？」

由宇が首をかしげ人差し指でこめかみにあてながら考える。

「わかってるわよ！言葉のあやでしょそんなの。いちいちつまないで……って由宇ちゃん？」

「はい？」

かなりの天然キャラだったらしくまじめに返答していたのだ。

「ま、いいや。なんか力抜けちゃった。由宇ちゃんはどうか部活入るの？」

「いえ、あたしは沢山の人たちと一緒になんかやるのって苦手で、それに運動音痴だし……文化系でも手先は不器用だし……文芸部とか園芸部とか調理部とかだったら」

「全部ないわよそれ」

「そーなんですか、やつぱり部活はやめとこつかな」

「由宇ちゃんてなんか得意な事とかあるの？」

「そうですね、お料理は好きですよ。毎朝お弁当はお父さんのと弟の私の分全部私がつってるんです」

「まじでー、すごいねあたしなんか朝起きるだけで精一杯。お弁当どころじゃないわ」

「作るの好きですから」

「じゃあさ、あたしのお嫁さんになってよーそしておいしいご飯毎日お願い」

「え？で、でも蘭さんは女の人ですから……私も……それにも……それに高校生だし」

俯いてモジモジしながら由宇

「由宇ちゃん？おい。悩むところそこか、突っ込まれないってのも寂しい……」

だめだこりゃ、と頭を抱える蘭子。

二人は「ぽー」と調子の外れた音の鳴り響く音楽講堂の前を通り下駄箱へ向かった。下駄箱の向こう側はいくつかの特別教室が並びその先にはプールへ繋がる階段があるのだがそこでひとだか

りができていて何やら騒々しい。

蘭子は、何が起きているのか大体の想像はついたので、無視して下駄箱へ向かう。

「由宇ちゃん、帰りましょ」

「え、あ、はい。でも、あの人たち何してるんでしょう」

「いいのよ、無視無視」

「でも、誰かいじめられてるみたいですけど……助けに行かなくちゃ。蘭子さん、ね、困ってる人いたら助けなきゃでしょ？」

「あれはいじめられてるんじゃないかって」

と、蘭子がいいかけたが、既に由宇は人だかりの方へ走っていった。

「もう、どうせ健が水泳部の更衣室に忍び込んだとかそんなのなんだから……」

しかたなく由宇の後を追いかける。

問題の廊下では男子が正座をさせられ、女子に囲まれゲシゲシと蹴られていた。勿論、男子とは浅見健であった。

「あの、すいません」

由宇が声をかけると

「あなたもこいつに覗かれたの？それとも体操着でも盗られた？いいわよ一緒に懲らしめましょ」

女子水泳部の数人が再びゲシゲシと蹴りをいれる。

健は観念しているのか蹴られるがままである。恍惚とした表情にもみえるのは気のせいだろうか……。

「え？え？え？えー？覗きですか？あ、浅見さん？？」

激しく驚く由宇。

「そんな、ショックです」

「何、あんたこいつの彼女なの？だったらちゃんと首に縄でもつけてあちこちウロウロさせないようにしといてよね」

水泳部員に由宇が責められる。

「あの、ごめんなさい」

半泣きになりながら恨めしそうな目で健をみつめり由宇。そこに蘭子が追いついた。

「だからいったでしょ、無視して帰ればよかったのに。どうせ健が下着泥棒か覗きかなんかしただんしょ」

「そうみたいです。浅見さんがそんなことするなんてショックです……」

ウルウル目になりながらゲシゲシと健に蹴りを入れる。

「しかたないな、健、貸し一個だからね高いんだからおぼえときなさいよっ」

蘭子は正座させられている健の前にたつと、グーで一発殴った後、女子達のほうへ向き直りいきなり土下座をした。

「すいません、もう許してやってください。こいつがしたことは許されないかもしれないけど、お願いします」

「蘭……」

「蘭さん……なんにもそこまで」

「わかったわよ、ほんとに首に縄でもつけてちゃんと放し飼いにしないでよ」

散々蹴り倒していたので気が晴れたのか、口々に文句いいながら女子達は練習へ向かっていった。

「あんたねっこれで何回目よ、中学時代からこんなことばっかしていい加減にしないよ」

「ごめん、蘭」

「うつさい！帰るわよ」

蘭子は由宇の手を取ると、スタスタと早足で由宇を引きずりながら帰っていった。

その後をトボトボ健は歩いていく

「トリニティストアか……かつこわりー俺」

カラスの鳴き声がどこからか聞こえる。

「ほう、あれが伝説の戦士ですか……造作も無い。わたくしが出る程のものではなさそうですね。しかし、少し奴等の情報を少し集

めておかないといけませんね」

闇の伯爵ラウムである。一連の騒動の中の学生に取り憑いて健達の様子を伺っていたのだ。憑依を解くと素早く姿を隠し、屋上へと身を移した。

天を仰ぎ杖を宙につきだす。杖の先が妖しく輝くと空が割れ、その中から一人の使途を呼び寄せた。

「もう少し寝かせてよー、あたしを呼んだの誰さ？」

黒いマントの下に、白いブラウスに赤いプリーツスカートを身にまとった魔道士のような姿をした女の子が現れた。

「なんだ、ラウムのじつちゃんじゃないか。なんの御用？」

「うむ、ルシフェル様の為に一仕事してもらおうと思ってな。吸血幽魔力才、お前にしばらくこの現有表層界に潜入してもらいたいのだ」

「それで？」

首をかしげながらラウムに問い返す。

魔道士のような風体をしているが、中学生かと間違っほど小さく金色に輝く髪をポニーテールにまとめ笑顔がとても愛らしい。幽玄界からの使徒とは思えないほどかわいらしい姿をしている。

「この学校に伝説の戦士トリニティスターがいてな、我々の計画を邪魔しておるのだよ。そこで、この世界のこの学校にしばらく通い、奴等の動向を報告して欲しいのだ。その手配は既にしてある」

「ルシフェル様の為といわれたら断れないね、いつから始めればいいんだい？」

「明日、一年三組というところに転校生ということで情報を操作してある」

「はい。じゃあ、やつつけなくていいの？」

「それはリリス様をお願いしてある」

「つまんないの。あたしじゃ無理ってことなのね」

「まあ、そういうな。お前にはリリス様の使い魔として働いてもらうのだ」

「そいつらに近づいて色々邪魔すればいいって事だね。それなら
まかせときー」

「頼んだぞ」

「はいよー。じゃあいつてくるー」

ポンツと屋上から姿を消すと、次の瞬間には私立三田町高校の制服を着て校門の前に現れた。

ブンブンと音が鳴りそうなくらい屋上へ向かって手をふる力才。

その姿は誰も吸血幽魔とは思えないのであった。

「……少々不安な気もするが、力才ならきつと上手くやってくれるはず。あとはリリス様をどう動かすかですね」

肩の力ラスに話しかけるような独り言をつぶやきながら、すつとラウムは姿を消した。

「昨日はごめんね、なんかみつともないとこみせちゃって」

健がめずらしく朝いつもより30分も早く校門前の坂道を歩いていた。

「いえ、ちょっとはびっくりしましたけど……でも平気です。私のほうこそごめんなさい、浅見さんのことおいて帰ってしまったみたいで。」

「いいのいいのーいつものことだし。蘭と二人だけだと怖いし。由宇ちゃんのおかげであの後、蘭に怒られずに済んだしね」

由宇の登校時間にあわせてというよりは、いつもの時間だと蘭子と登校することになり、いつも以上に強烈な力バンでの挨拶が予想されたからだ。

健と由宇は校門を抜け、下駄箱へ向かうと、そこには雄二と蘭子何か真剣な面持ちで話していた。

「おはようございます。ちょうどよかった由宇さんと浅見くん、ちよつといいですか」

雄二は二人を呼び寄せる。

「おはよう、蘭、おまえいつもより早いじゃん？どしたんだ」

「あんたにいわれたくないわよ。いつもはあたしより遅いくせに。由宇ちゃんと一緒に登校できて良かったじゃない」

「あ、ああ、偶然そこで一緒になったただけなんだけどね」

「はい、待ち合わせとかじゃないですから絶対！」

由宇が必死に否定。

「朝の挨拶はすみましたか、早速ですけど話進めます。HRもはじまってしまいますから」

雄二がカバンの中から分厚い本を出した。古い辞典のような分厚い本で留め金がついており、薄紫色のオーラが本から漂っている。

雄二をのぞく三人は周囲に人がいないか、誰かに気がつかれないか慌てて確認をする。

「これは、普通の人間には見えないんですよ。」

「ほんとですか？こんなに光ってるのに」

由宇が目丸くして驚く。

「この中に封印された幽玄界の使徒達がねむっているのですが…いくつかの封印が解かれてしまったのです」

いつもは鋭い目つきをしている雄二だが、心なしか瞳に力がない。

「続きはあたしが言うね」

雄二と二人で話していたので受け売り感たつぷりだが、腰に両手を当てて得意げに続ける蘭子。

「あたしたちの世界に何匹か潜んでるってことらしいわ。それも結構強烈なやつがね。雄二君がこっちにその本を持ってきちゃったからってわけじゃないみたいだけど、かないだのヘケトとかいう蛙もやつつけたときには本に封印されたみたいなんだけど、今この本にはヘケトの姿もなくなってるの」

「ということは、こないだやつつけた奴がにげちゃったってこと？俺ががんばったのに！」

「そうなんですか……」

「もうしわけありません。僕がしっかり封印を確認しておくべきでした」

雄二は下駄箱にもたれかかり天井を半ば放心状態でみつめる。

「それだけじゃなくて、幽夢魔リリスと吸血幽魔力才つてのもいなくなってるんだって。他にも魑魅魍魎みたいのがいないらしいんだけど、その辺は雄二君が何とかできるっていうからいいとして、リリスってのはかなり強力な使徒らしいわよ」

「そ、そんなあ、どうしたらいいんですか」

由宇が半泣きで雄二に抗議する。

「みなさんに協力してもらうしか手はありません。リリスとカオ、その他魑魅魍魎らが一度に押し寄せるとかなりてこずると思います、彼らにそんな連携はできないと思いますし。一個体ずつならなんとかなるはずですよ」

「なんとかなるって、ちょっと無責任ないいかたしないでくれよ」
健が心なしに怒っている。

「たしかに、俺らには力があるから敵はやっつけなきゃいけないんだろうけどさ。何が目的なんだよ」

「以前に、幽玄界とこの世界の位相がずれて繋がったっていうお話はしましたよね」

「ああ、聞いたな」

「偶然や事故、何らかのトラブルでつながったというわけではなさそうなのです」

話の根本に迫ってきたためか、蘭子と由宇は二人の会話を聞き漏らすまいと耳を向ける。

「どういうことだ？」

健が問い返した瞬間、始業のチャイムが鳴り響く。

「続きは、昼休みにでもしましょう。四人もまとめて遅刻ってわけにもいかないでしょうしね」

「そうね、お昼でも食べながら話ましょか。あ、健あんたお昼どっすんの？」

「学食でなんか買ってきて来る」

「早くしないと遅刻になっちゃいますよ」

「遅刻！え？せつかく早起きたのに勘弁だつて」

「そういや健、あんたなんで早起きしたの？」

「え……いや、そりゃいい天気だったからね。早起きは三文の徳だろ」

と、健が答えるのと同時に

「昨日のことで蘭子さんに顔合わせづらかったみたいですよ」と、由宇が何気なく答える。

「あ、そう。一応良心つてものはあるんだ。でも、普通あたしに一言あつてもいいんじゃないのかな」

「遅刻するぞー早くいこうぜ」

「あー、まちなさいよ健！にげるなー」

健がみんなを置いてダッシュすると蘭子はその後を追う。おそろく音楽講堂を抜けた先の階段あたりで追いつかれ、蘭子のカバンで一撃くらうだろう。

「さあ、僕らもいきましよう」

雄二と由宇は後から教室へ向かった。

まだ4月である。

桜こそ散ってしまったが、まだまだクラスメートの顔と名前も覚えきっていないこの時期に、一年三組で大きな事件が起きた。

転校生が来たのである。

海外からの引越しとかいうお家の事情らしいのだが、クラスは騒然としていた。

「はい、しずかにー、今日からこのクラスの仲間になる転校生を紹介するぞー」

しゃきつとしない声で担任教師は自分の横に立っている女の子に注目させる。

「岡真由くん。なんでもカナダからご両親のお仕事の都合で日本に引っ越してきたということだな、みんな仲良くしてやってくれなー」

担任に紹介された真由は、輝く金色の髪の毛をポニーテールに結い身の丈は中学生と間違われるほど小さい笑顔の愛らしい少女であった。

誰もが日本語をうまくあやつれないだろうと予想しているところに「みなさん、はじめまして！岡真由です。今日からこの学校に通うことになりましたのでよろしくお願いします。この町には昨日引っ越してきたばかりなので色々教えてください。後、日本の習慣もよくわからないからおかしなとしても笑わないでくださいね」

その一言で教室内は、ほっと安堵した。

その後は、真由の周囲にほぼクラス全員がむらがり質問攻めにあわせていた。

真由は嫌な顔ひとつしないで、明るい笑顔をふりまき答えている。時折、柴田雄二のほうへ様子を伺うように視線を送ってはいたが。

そう、岡真由「おかまゆ」ゆうまかお「幽魔力才」。

伯爵ラウムに呼び出され、雄二の持つ封印された使途の眠る本から抜け出したあの力才なのであった。

力才の持つ力により、トリニティストアーにも、雄二こと門番ミウでさえも感知することができないのであった。

何も気がつかない4人は、特に健は、力才に興味を示してはいたのだが、いつものスケベ根性丸出しと肘鉄をくらい、グーでなぐられたあげく蘭子に首根っこをつかまれてズルズルといったもの屋上へとむかつていったのである。

「あいつがアージエントか……あたしのこと気がついたのかなー？他の連中は気がついてなかったみたいけど……」

真由は独り言のように呟くと、クラスの輪の中に溶け込んでいった。

屋上にたどりついた四人は朝の話の続きをと、雄二、蘭子を中心に話し合っていた。

一人健だけは何か考えているようであったが……。

「でね、リリースと力才っていうのはどんな奴なの？雄二君は会っ

たこととかあるの？」

と、かわいらしいお弁当をもしやもしや食べながら蘭が口火を切る。

健が学食で買った焼きそばパンを頬張りながら。

「なあ蘭、おまえ弁当って自分でつくってんのか？」

「どうだつていいでしょー、どうせあたしは由宇ちゃんみたいにお料理得意じゃなくてすいませんでした。」

箸を健に向けガルルルと唸る蘭子は、

「お弁当作ってきたんだけど、やっぱり渡すのってはずかしいわ。

それになんかいつもと雰囲気違って話しかけにくいんだよね、どうしよ、せつかく作ったのに……あ、そーだ！みんなの分って言うて作ってくれば。でもそんなにたくさん朝からじゃ無理だし……」

箸を口に咥え、百面相しながらあれやこれやと作戦を練っていた。

そこへ、由宇は雄二へ質問を始めたので、慌てて話に参加する。

「あの……で、雄二さんは知ってるんですか？封印の解けた使徒達のこと」

「ええ、幽玄界には特別な力や固体を持たない魂のような存在でいる幽玄徒が殆どなのですが、中には実体を持ち魔能力を持つ者が存在します。幽玄徒というのは、みなさんのいういわゆるお化けや幽霊という認識でいいと思います。特殊な力を持つ者、その輩を幽玄界の使徒と呼んでいます。ヘクトやリリス、カオ達ですね」

「妖怪みたいなイメージなのかしら……」と、由宇が首をかしげながら雄二を見る。

「妖怪に近く、また、魔能人といったほうがいいかもしれませんが以前現れたヘクトは蛙の姿をしていましたが、普段はリリスやカオも人間の女性と変わらない姿をしています。門番の僕がこの姿でみんなと話しているのと同じようにね」

「そっぴや雄二はあっち側の住人なんだつたよな」

「ええ、そうです。それと朝、ゆがんだ空間が偶然じゃないといいましたよね」

「そそ、それよそれ誰がどーしてこんなことしてるかってこと」
今朝、雄二から話を聞いているらしい蘭子が待ってましたとばかりに口を挟む

「何かわかったことでもあるんですか」

由宇はこれまでの話だけでも泣きそうになっていた。その姿にいつもなら反応するはずの健なのだが、深刻な顔をし、何かを考えている

「健？さつきから変だよ。まさかこんな話でびびっちゃってるんじゃないでしょーね。しっかりしなさいよ」

「あ、ああ、びびってるんじゃないさ。ただな、なんかがひつかかってるんだ。こう、なんちうのかな、胸のあたりがワジワジするとか妙な胸騒ぎっていうか……」

「大丈夫ですか」

雄二、由宇は、健に近づく。

「うん、蘭子とにかく説明続けるよ」

「わかったわよ」

雄二の様子をきにしながら、蘭子は説明を続ける。

「幽大魔ルシフェルっていういわば大ボスね、そいつと、幽伯魔ラウムっていうのが、この世界を幽玄徒でいっぱいにしようとして両方の世界をくつつけてるんだって」

「そうです、ヘクトを使い卵を大量に人間に生みつけ、人間の生気を奪い幽玄徒を生み出す。そうすればこの世界も幽玄界も区分けが無くなり、ルシフェルの支配下におくことができるというわけです」

「そこであたし達の出番ってわけ」

「ひええ……」

由宇が顔面蒼白になり、情けない声で「そんな大変なこと私なんかできません。どうしよう……」と泣き出してしまった。

「だいじょぶよ、由宇ちゃん。あたし達はトリニティスターなんだから。由宇ちゃんはキュアのトリニティでしょ。みんなの為に一

緒に戦いましょう」

「は、はい……。で、でも……」
ちらつと健のほうを見る。

「そうだな、やれるだけやるしかないな。雄二、色々情報ありがと。またなんかわかったら頼むぜ」

健はまだ難しい顔をしている。

「はい、わかることは全てお話していきます。なにせあなた達にお願いするしかないのですから」

「じゃ、行くぞ」

健は屋上から出て行こうと三人を促す。

「えーちよつと待ってください、まだお弁当食べ終わってないんだから、もう少しだけ待っててください」

「どうしたのよ！ おかしいわよ健」

「ごめん、でもちよつとさつきから気になることあってさ。俺一人でだいじょぶだから、みんなはゆっくりお昼してて」

走り出す健

「変なの」

蘭子はしかめ面でアツカンベーと舌をだし、健の後姿へ向けた。

「絶対なんか変だ……笑われるかと思って言わなかったけど、あの転校生……いくら家の事情だからといって4月の新学期はじまって2週間たつてないのに転校してくるし。それに名前……岡真由……おかまゆ……逆さから読んだら……でも、幽玄界の使徒が現れたら俺らは変身できるんだよな、でもそんな感じはまったくしないし……」

だけとおかしい、きっと何かあるはず」

独り言をつぶやきながら教室へ向かう健。
「でもどうやって確かめよう。直接力才ですかって聞くわけにも行かないだろうし、まだ何も起きてない」

屋上から階段を降りると、3階は三年生の教室だ。そこを通り抜けると職員室だ。担任にでも聞いてみようかとも思ったが、きつと

無駄だろう。

「さりげなく本人と話でもしてみよ」

くるっと今来た道に戻ろうと振り返ると目の前に岡真由が立っていた。

「うあー!!」

「きゃー!」

健が勢いよく振り返った為、岡真由はかなり驚いた様子だったが「びつくりだー、急に振り返らないでよー心臓止まるかと思ったじゃない」

「ごめんごめん、考え事してたもんだから……岡さんだよ」

「そうですけど、あなたは?」

「同じクラスの浅見。脅かしちゃってごめんね。で、どしたの? 職員室?」

「同じクラスの人か! よかったー。実は、どんな学校なんだろうって探検したら迷子になっちゃって、へへ」
肩をすくめ、かわいく舌をちよつとだす。

「そうなんだ、よかったら案内しようか? まだ昼休み時間あるだろう」

「いいんですか、お願いします」

健はチャンスと思い自分もまだまだ不慣れな校内を案内しはじめた。視聴覚室、化学室、部活の部室が集まる部室棟に体育館、昨日健がボコボコにされたプール……

校庭に抜けてテニスコートやグラウンド……。

色々歩きながら他愛の無い話をしていたが、妖しいどころかわいく明るくて話していて楽しいのだ。

「……気のせいだったのかな」

健は色々探りを入れるつもりだったのだが、岡真由との会話に惹きこまれていく。

屋上では由宇と雄二は先に教室へ戻り、蘭子一人屋上から他の学

生を眺めていた。

健の様子が変だったせいか、蘭子も落ち着きがなかった。

「どうしたんだる健のやつ、いつもはもっとなんかこう……ふわふわしてるんだけど」

そこへ、健と岡真由が二人で楽しげに話しながら歩いている姿が目に入った。

「あ、あいつ……人が心配してやったのに女の子と遊びに行くからこつちの話早く打ち切りたかったただだったのか！」

屋上の鉄格子を握り締め怒り心頭の蘭子。

頭から蒸気がぶしゅーとつでているかのようなのである。

次の瞬間、蘭子は走り出していた。

階段を一段飛ばしに駆け下り、廊下を全速力で駆け抜ける。何人かの上級生にぶつかりながら、一階までとにかくひたすら走りまくった。

いつもの下駄箱近くの音楽講堂まで来たときには、蘭子の顔は、涙でグシャグシャになっていた。

「健のばか、健なんかちびっこ金髪転校生とよろしくしてりやいのよ……」

蘭子は上履きのまま外へ出て、そのまま学校の外へトボトボとあるきだしていった。

トボトボと坂道を下り、都会の喧騒の中をグシャグシャの顔を見られないようにうつむきながら歩く。大きな交差点をわたると、自然公園があった。

公園の中は、昼寝をするサラリーマンや高級マンションの住人の犬の散歩をする人たちをチラホラ見かける程度で、すぐ脇を幹線道路が走っているのだがとても静かな公園だ。

小高い丘になっている部分にベンチがあり、蘭子はそこへ腰掛けるとカバンの中から弁当箱を一つとりだした。

「あいつ中学の時からコンビ二おにぎりかパンばかりだったから、早起きして作ってみたけど……渡せなかったけど……あいつお

かあさんいないし、いつもデレデレ女の子おっかけてんのもなんとなくそのせいかもって思ってたし。だから昨日だって悔しかったけどあいつの為に頭下げて……でも、あたしが勝手にしてるだけなんだよね」

いつも明るく強気な蘭子もここ数日の出来事にかなり参っていた。「由宇ちゃんと朝は一緒だったし、真由つて子となんか楽しそうに歩いてるし……なんかばつかみみたいだ、あたし」

ベンチの背もたれに寄りかかり両手をあげて大きく伸びをし「よし、負けるな蘭子。こんなことで悩むなんて、らしくないぞ！」顔を両手でパシッと叩きたちあがった。

その瞬間。

「ガガガガガガッ」

ラジオのチューニングがあっていないようなノイズと共に、周囲の景色が灰色に変わり動いているもの全てが止まる。

「ちょ、まじ！！なんでこんなところで……」

蘭子の足元には、体長1m程で手にはフォークのような槍を持ち、子供のようだが顔は老人という輩が、数十体群がっていた。

「こいつら、封印されてた魑魅魍魎^{インブ}達だわ。健も由宇ちゃんもいない、あたし一人でなんとかしなきゃ」

真紅のオーラを放ちツインテールにきれいにまとめた髪の毛がふりほどかれ、肩には真紅のマント、手にはレイピアとひし形の小さな盾が握られた。

クリムゾンの顕現だ。

「こっちは虫の居所わるいんだから覚悟しなさいよね。とっちめてやるんだから」

インプはすばしっこく蘭子の周囲を走り回り、飛びまわる。

一個体としてはたいしたことのないのだが、なにせ数が数だ。

「えい、うりゃ。しつっこいわね、モーーー」

倒せば倒したただけ数も増え、足元から腰近くまでクリムゾンはインプに埋め尽くされてしまった。

「ど、どうしよう……あたしの力だけじゃこいつら全部なんて無理だよ」

直線的に突くクリムゾンの攻撃だけでは次から次へと襲ってくるインプはさばききれないのであった。

インプの槍に突かれ傷だらけのクリムゾンのオーラは少しずつ薄れていく。小さな槍を持つインプだが、数十、いや数百匹にも増殖しているのだ。

「いや、た、たすけて……健。きゃーーーーー」

全身をインプに取り囲まれ、血まみれのクリムゾン。

頼みの武具も役に立たず真紅の炎も燃え上がらない。

蘭子は戦意を喪失してしまい、恐怖が襲い掛かる。そして、とうとう力尽き意識を失ってしまった。

真由を連れて校内をウロウロしていた健は、遠くに蘭子の悲鳴を聞いた……ような気がした。

「どうかしたの？」

岡真由は、後ろに手を組み、腰を曲げ、下から健の顔を覗き込む。

「いいや、ちょっと……ね」

声の聞こえた方角を振り返る。

「ごめん、岡さん。教室へ戻っててくれる？俺、用事思い出しちゃってさ」

言うが早いか走り出す健。

「すげーやな予感がする。蘭になんかあったのかも。さつき感じた胸騒ぎって岡さんのせいじゃなかったとしたら……俺って本当にバカだー。待ってる蘭！」

校門とは反対の方向へ向かい、体育館の脇を通り抜けてフェンスを飛び越える。

運動神経は悪くないほうだが、恐ろしく俊敏に動ける。トリニテイスターは発動していないのに……。

頭の中には、蘭子のいる場所、状態が鮮明な映像となって映って

いて、間違はなく蘭子は健に助けを求めているのがわかるのだ。

「蘭ー！！がんばれ、すぐ行くぞー！」

人目も気にせず大声で叫ぶ健。

その声が教室にいる由宇へと届いた。

「え？浅見さん？」

教室の窓をガラスと開け、身を乗り出し辺りを見回す。

そこにはフェンスを飛び越えようとする健の姿が見えた。

「どこいくんだろう、もうすぐ午後の授業はじまっちゃうのに」

窓ガラスを閉め、自分の席へと戻ってしまった。

雄二も同じように何事もなかったかのように授業の準備をしている。

カオの張った結界にすっぽりと囲まれているため、異常事態に気がつかないのだ。

一人取り残された岡真由は妖しく微笑んでいた。その口元は牙のように犬歯が光っている。

「今更、慌てても無駄だよー、エージェント。クリムゾンの生命活動はもう止まる寸前だもん。でも、もっと早くクリムゾンに気がついちゃったらずかつたな……でもでも全然平気、あたしの事も気がつかなかったみたい」

健の遠くなっていく背中を見つめながら、真由の背中には黒マント、吸血幽魔力オへと姿を変え、屋上のはるか上空へ浮遊していた。

「あー、楽しかったーこのままこの学校にすみついちゃおっかなー、転校してきてクラスメイトがいきなり死んじゃうってのも寂しいけど、あの子エージェントのこと好きみたいだったし……。敵は少ないほうがいいじゃない？」

空中で杖に腰掛け、くるくる回転しながら、楽しそうに一人で呟く。

「エージェントがどんな顔するか楽しみだけど、午後の授業うけてこよっと」

杖から飛び降り、持ち替えた杖を「えいつ」と振り回すと、桃色の煙幕に包まれ次の瞬間には岡真由として席に座っていた。

「食後は、脳の酸素不足からか眠くなるとかいわれたけど、今日は特に眠い……なんで脳が酸素不足になるんだろうね？胃とか消化器官に血流が集中するからなんだってラウムのじっちゃんが言ってたな。人間って思ってる以上に脆い生き物、すぐ壊れちゃう、幽魔としての形はもっと便利で合理的だよ？人間って不便な生き物だなあ」

授業が始まる早々、居眠りをしていた真由は教師に教科書の角で叩かれ、こんなことを考えていた。

岡真由として人間の姿をしている限り、幽魔といえど、人としての機能しかもたない。

頭の中もまるで人間と同じになっているのだ。

真由の席は廊下側の一番後ろだ。対角線上にたどった先の窓側の一番前に視線を送る。その席には、健と蘭子が座っているはずだが、二人はいない。

「ふふ、いまごろどーしてるかなー」

ほくそ笑む真由に再び教科書の角が再び襲い掛かる。

「痛っ！」

思わず叫んでしまった。

「注意されてニヤニヤしてるやつがあるか！」

「はい、気をつけます」

素直に言うことを聞いてみる。

クラスメートからは、ドツと笑いが起き、恥ずかしげに真由は、教科書に顔を埋める。

「不便な生き物だけど、幽玄界じゃこんな学校なんてものなかったじゃん？ちよつとどころかかなり面白いかも。いつもラウムのじっちゃんかりりス様に叱られてばっかだったし、こんなに沢山の中にいたことなかったしねー」

授業が楽しいというわけではなく、人との触れ合いに楽しさを見出しているようだ。

「このみんな、ヘケトの抛りしろにされちゃうから、ちょっとかわいそうだけどそれまでの間、あたしはここで楽しませてもらおうかな」

「残り二人、アージェントとキュア……星の輝きまだもらってないみたいだし、やっちゃうなら早いほうがいいんだろうけどね」

残りのトリニティの由宇へ視線をやる。

その由宇は、目の前に座っているはずの蘭子と健がない座席をぼんやり見つめている。お昼休みに一緒だったというものの、急にいなくなった健、蘭子はのんびりしたいからと言って屋上に一人残っていたはず。

健は岡真由と一緒に学校内を歩いてたところを雄二がみたといっていた。

「二人ともどこいつちゃったんだろっ、携帯もつながらないんだよね……」

不安げに呟く。

幽玄界からの侵入者がやってきたときの時間が止まった場所では携帯などの電子機器はつかえなくなると雄二から説明されていた。まさかと思う気持ちが段々と強くなっていくのだ。

雄二は授業中ずっと瞑想しているかのように目を閉じ、二人の意識を探っていた。

しかし、電波が混線しているみたいにまるで気配を察知できない。

「おかしい……」

雄二の持っている封印の書を取りだしリリースやカオの気配も探るがこちらにもまるで反応がない。

由宇と雄二はそれぞれ不安を抱えながら、健の叫び声を思い出す。

「蘭、がんばれ今行くぞっていったような……まさか、ね」

休み時間になると、由宇と雄二は真由のところへ向かう。

「ねえ、岡さん。お昼休みに浅見さんと一緒だったじゃない？午

後になつても戻つてこないんだけど何か聞いていないかな」

「蘭子さんも戻つてこないから心配でね」

「あたし知らないよ、確かに校内案内してもらったけど。用事思
い出したつて言つてもものすごい勢いで走つていなくなっちゃったも
ん」

「何か言つてなかったか？どこに行くとか、僕達に伝言とか……
少しくらい何か言つてただろ？」

雄二が少し強い口調で真由の肩をゆすり、問い詰める。

真由は雄二の態度に驚いて見せ、両手で顔を覆い今にも泣きだし
そうに「知らないもん、何も言つてなかったし、校内案内してもら
っただけだもん……」

「ご、ごめんなさい真由さん。責めたりおこつてるわけじゃないの、
ただ、浅見さんと蘭子さんが心配で……」

由宇も今にも泣きだしそうだ。

「すまなかつた、岡さん。気にしないでくれ」

「由宇さん、探しにいきましょう。もしかして、二人に何かあつ
たのかもしれない」

「でも、授業が……そうですね、授業なんかより二人探さなきゃ
です」

二人は急いで教室から飛び出していった。

始業のチャイムが鳴り響き、当てもないまま走り出した二人は街
の喧騒の中へと消えていく。

「もう、遅いと思うよー。それにあんた達あたしの結界から抜け
出せないだろうしね」

真由は肩をすくめ小さく舌をだし、そう呟くと、妖しく微笑み二
人を見送った。

蘭子の危機を察知し真由と校庭で別れた健は、学校を飛び出し蘭
子の足取りを辿る。

学校の隣は、病院が建ちその隣には三十階建てのオフィスビルが

そびえたつ。校門前から登校時にはしんどい坂道であるが、逆方向のくだり坂になり、走るには少し足がもつれて走りにくい。

しかし、健は走る。

「蘭が呼んでる……どこだ！蘭」

蘭子が見ている景色が頭の中に映像として見えているのだが、健にはそれがどこなのか見当がつかないのだ。

「公園だよな？結構広くて綺麗な公園。近くに高速道路かな？つてことはあっちだ」

坂道を降りきり駅とは反対方向のテレビ塔のあるほうへ向かう、しばらく走ると大きな交差点にでた。目の前には緑に囲まれた広い自然公園がみえていた。

「あそこだ。待つてろ蘭」

信号がなかなか青に変わらないので無理やり渡ろうと思っても交通量が多すぎてなかなか渡れない。

隙を見て飛び出し、激しくクラクションをならされ、ドライバーに怒鳴られながら必死の思いで渡りきり、公園の入り口に辿りついた。

日ごろの運動不足がたたり激しく息を切らせているが、休むわけにはいかない。

大きく深呼吸し、意識を集中させる

「どこだ……」

アスレチックや遊具が並んでいる広場の向こう側の小高くなっている丘辺りから、ヒトとは違う生臭さを感じ、何度か経験した幽玄界の異空間が見える。

しかし、蘭子の気配を感じないのである……。

「まさか、蘭が？」

「うおおおおおおおおおおお……！！！！！！！！」

怒りにも似た咆哮が健の心の奥から湧き上がり、その両手には身の丈程の大剣、背には白銀のマントを背負ったアージェントへと姿を変える。

大剣を天に突き上げると、銀色の炎を吐き出した。

その炎は天を貫き星空がのぞく。銀色に強く輝く星達が自らが光を発していくもののペンタグラム（の形）がまぶしく浮かび上がった。

ペンタグラムは光の矢のようにアージエントに降り注ぎ襲い掛かる。

その全てを身体で受け止め大きく叫ぶ

「うあああああああああああ！！！！！！」

アージエントのオーラの輝きが美しく光り輝き、身の丈ほどある大剣の柄にペンタグラムが浮き出てきた。

カオが教室で一人呟いていた星の輝きをその身に受けたのである。異空間へ飛び込むと、身長1mの老人顔の化け物が折り重なりあい山になっていた。その下から蘭子の腕らしきものが覗いている。

「今助けてやるからな、もう少しだからな待つてる蘭」

そう呟くと、左手で大剣持ち化け物達に向け、右手を天にかざした。

「五つの輝ける星達よ、我らがトリニティに力を……邪悪なる力を持つものへ制裁を」

天からアージエントの右手へと雷が落ちる。

そのエネルギーは大剣の先へ充填され大きな光の弾となり化け物たちを焼き尽くした。

「やった……」

元の姿に戻った健は蘭子の姿を求める。

「おい、蘭！すっかりしろ」

激しく揺さぶるが返事が無い。

蘭子の姿は力なく横たわり、傷だらけで自慢のツインテールも泥だらけだ。

インプの槍に突かれた跡からは血が流れ、血を吐き、いつもの怒ったような瞳は閉じたままで涙の跡が残っている。

「蘭……ごめん、俺がもっと早く気がついてれば」

いつもの明るく元気な蘭子の姿は何処へ行ってしまったのだろう。
呼吸すら感じ取ることができないのである

「まさか、そ、そんな」

ガツクリと膝を突き、蘭子を抱き寄せる。

健は、しばらく蘭子を見つめていた。そして目を閉じたままの蘭子へ語りかける。

「俺さ、お前と同じ高校受かって、クラスでしかも隣の席にいてかなりうれしかったんだぜ。それと知ってたか？お前が三田町高校受けるって言うから隠れて必死に受験勉強してたんだぞ。中学の担任には無茶だからやめろって何度も言われたんだけどさ……」

「もつといっぱい一緒に色んなことしたかった、俺お調子者だし馬鹿なことばっかやって蘭に迷惑かけたりもしたけどさ、ほんとごめんな……」

小さな声で健はささやき、蘭子の血と泥で汚れた額に小さくキスをする。

蘭子のオーラは真紅であった。

少し紫がかった深い紅色が蘭子を包み込みペンタグラムの紋章が浮かび上がった。

健のオーラは白銀であった。

今日の戦いで星の力を授かった。

健のオーラは力強く光り輝く白銀になった。

ペンタグラムの星の力が触れ合うことで、蘭子にも星の力が流れているのだ。

二人を優しく包み込むように異空間全体をアクアブルーのオーラに囲まれていたのだ。

由宇と雄二の二人は教室を飛び出し階段を駆け下りる。いつもの音楽講堂と学食を抜けて校門へ向かおうとしたのだが、階段を降りると三階の三年生の教室のフロアにでた。

「え？」

「ここは……」

二人は狐につままれたかのようにキョトンとした顔をする。

「屋上からおりてきたんでしたっけ？」

由宇は人差し指を顎にあてて首を可愛くかしげる。

「これは、まさか。とにかく行って見ましょう」

雄二に促され、再び走り出した。

三年生の教室を抜けると職員室が見えてくる。教師に見つかるتماずいので職員室の手前を曲がりくだりの階段へは遠回りになるが迂回しながら進む。

同じフロアーを走り続けていたはずだが、目の前には一階の体育館への入り口が見えてきた。

「慌ててるせいで、間違ったのかな……」

何が起きているのか理解できず目をまん丸にして不思議がる由宇。子供に言い含めるような口調で話す雄二。

「僕達は階段を使わずまっすぐ同じフロアを走りましたよね」

「はい、たぶんそのはずだと…… 思います」

「三階から一階へ階段も使わず移動できる方法なんかありますか？」

「はい、たぶん無いはずだと…… 思います」

何度も何度も階段を行き来し、屋上やら、一年三組の教室やら音楽講堂やらプールやら学校中の施設にめぐり合えるものの、どうしても校門にはたどりつくことができない。

息を切らしながら雄二は、

「これは幽玄界の使徒の仕業に違いありません。おそらくリリースがカオの見せている幻か、いや、おそらく結界」

「ということとは、ということですか？」

「この学校に閉じ込められた。ということになりますね」

「出る方法はないんでしょうか……」

「この結界の中でうまくできるかどうかわかりませんが、一つだけ方法があります」

そういつて雄二は大きく息を吸い込み、両手を大きく広げ目を閉じた。

すると、雄二の身体が藍色のオーラを放ちながら宙に浮遊し、呪文を唱えるように何か口の中で呟いている。

周囲の空気の流れが変わり、雄二へと流れ込む。

「この周囲だけ、小さな空間ですが僕の支配下に置き外界への門をつくりました。長く時間は持ちません、由宇さん！早く門をくぐって二人を探してください」

「でも、雄二さんはどうするんですか？」
不安げに雄二を見つめる由宇。

「僕はこの学校の中で迷子になっただけですから。それに、僕が行っても二人を助けることはできない。それができるのは由宇さん、あなたです。早く！」

「はい」

「戻ってきたら、僕のこと探しにきてくださいね。きっと学校ウロウロどこかさまよってると思いますから」

「わかりました。きっと探し出します」

雄二によってつくられた小さな門へ向かい由宇は走っていった。

雄二の門の中は、藍色のもやでよく前が見えなかったので、慎重なあしどりで小さな光を目指して進む。

数十メートルほど進むと、すんと落とし穴に落ちたように落下した。

「いったーい」

ぶつけたお尻をさすりながら周囲をみ渡すと、校門の外の坂道に出ていた。

「よかった……やっと外に出れたみたい。二人はどこいったんだろ。早く見つけて戻ってきて雄二さんも探さなくちゃだしね」

テテと由宇は坂道を下っていった。

異空間があれば簡単にみつかるのと思っていたと、空から昼間でもはつきりと銀色に輝く五角形の星が降ってくるのが見えた。

「あ、あれは、アージエント。まさか敵が……急がなきゃ」

由宇の小柄で少し茶色がかった毛色のボブカットが光を放ち薄い優しさと慈愛に満ちたような蛍光色のブルーに輝き始めた。肩には黒いマント、手にはタクトのような杖を持ちキュアは空を翔る。

異空間にすっぽりと包まれている公園に向かい一直線に。

公園では犬の散歩をしている有閑マダムや、昼寝に勤しむサラリーマンらしき人達がピクリとも動かずにいる。空から見下ろす限り現実のものとは思えない、まるでジオラマのようであった。

「あの光のところにアージエントとクリムゾンがいるはず。でも、私、役に立てるのかな……ヘケトと戦ったときも私のせいで苦戦したし……」

その時、大きな雷が目の中の公園に落ちた。

「きゃあ」

雷の衝撃で空から投げ出されそうになる。

しかし、その衝撃はどこか暖かく柔らかなのであった。

「なんか心地いい光り」

全身で光を浴びると、三角形を二つ合わせた星の形、ヘキサグラムがキュアの額に浮かび上がる。

ヘキサグラムはアクアブルーに輝き光を受けた湖のようにキラキラを光を放ちはじめ、キュアの全身を包み込む。

「クリムゾン……蘭子さんの生命の波動が消えちゃう。だめ!!」
宙を舞いながらキュアはタクトを天に向け目を閉じると、身にまとっていたオーラが激しく揺れ動きタクトの先でヘキサグラムが回転を始めた。

「五つの輝ける星達よ、青く輝く大地、地球よ、私たちトリニティに力を……正義の心に躍動を」

空と大地から五色の光と一陣の風が舞い降りる。

小さな六角形の星がキラキラと輝き異空間を包み込んでいった。

「う……うう」

蘭子の耳には健の声が遠くに聞こえていた。

身体感覚がまるでない、動こうと思うのだが、動き方をまるでわすれてしまっているかのようだった。

健が蘭子に向かって何か叫んでいる、両肩を激しく捕まれ揺さぶられた。

「なんだよ、痛いんだから揺するなよ。ちょ、健！痛いって」
声に出そうと必死に叫ぶが声もだせないのだ。

「あ、そっか……助けに来てくれたんだ。インプなんかによられちゃってかつこ悪いなあ。なんて言い訳しよっかな」

蘭子がそんなことを考えていると、健が自分の身体を抱きかかえているのが見える。

「あれ？あたしはあそこで倒れてる……ん？」
「もしかして、死んじゃった？あたし！？」

案外冷静に自分の姿を眺めながら「もっと早く助けに来てほしかったな、誰かさんのせいでこんなところでいじめてたんだからさ。まさかインプがあんなに出てくるとは思わなかったけど」

幽体の蘭子は本体の蘭子を抱きかかえている健の背中を蹴る。

……が、すりぬけてしまう。

「な、ほんとに死んじゃったのかな。やだな、どうしよっていうかあたしどうなるんだろ」

少しずつ自分の『死』を感じ始めた蘭子。

恐怖や不安を意外にも感じていないかわりに、悲しさと後悔に似たもどかしさがこみ上げてくる。

健の膝の上で横たわる血と泥で汚れた自分の身体を呆然と見つめていると、健が何か自分に向かって語っていた。

うまく聞き取れないほど小さな声だった。よく聞き取ろうと近づこうとしたそのとき、突然、健が蘭子の顔にキスをしようとしたのだ。

「あ、あ、あ、ちょ、ちょ、おま、えー……？？」

抵抗しようとするが、勿論殴ることも触れることさえもできず

にされるがままである。

額に。健の唇が触れた……。

「なんだ、おでこか 根性なしめ」

きつと蘭子の顔をみるとユルユルだったかもしれない、耳まで真っ赤になっただろう。

健の唇はなかなか離れてくれない、いつまでやってんだよと蘭子が思っていると、健が涙を流している。

「健……泣いてる？あたしの為に？」

健の涙は、蘭子にとってとても暖かくとても心地よい、空っぽになつた身体と心を満たしてくれているかのようだった。

「このまま時間とまっちゃえばいいのにな……」

遠くから二人の周囲に優しく大きなオーラが包み込んでいた。

同時に健のオーラも蘭子を包み込み、真紅の輝きを取り戻していく。

それは、深く紫がかった美しい情熱の紅だった。

「ん、ん……」

蘭子は目を覚ました。

「あれ？あたしなんでこんなところに？」

あたりを見まわすと公園のベンチで健に膝枕されている状態になっている。

「よお。起きたか？」

無愛想な顔して健。

「よかった。だいじょうぶですか？蘭子さん」

微笑みながら由宇。

「あれ、あたし……」

といいながら、蘭子はおでこを触り、健を見つめる。

「あんた、泣いてなかった？」

「ば、ばかいうなよ。そ、そんなことあるわけないだが」

「あれ？あれ??？」

状況がうまくのみこめていないらしい蘭子はこめかみに指をあて一生懸命何かを思い出そうとしている。

「ねね、健ちよつといい？」

「ん、何？」

「えいつ」

ぽかっとな健の顔をグーで殴る。

「いつてー、蘭、お、おまえ何すんだよ」

「そっかー生きてるし、殴れる。夢じゃないのね、よかったーあたし死んでたかとおもったわ」

元気よくベンチから跳ね起きると、ふたりへ「さ、学校もどりましょ」と小走りに走り出した。

「蘭ー！夢か確認するなら自分殴るだろー！おまえ、待てこら、まてー」

健も蘭子の後を追いかけて行く。

「まっってくださいよお」

一人取り残された由宇が追いかけてようとしたとき、ベンチの横に小さな包みが置いてあった。

「あれ？これお弁当だ。蘭子さんお昼休みはお弁当食べてたはずよね」

「んーこれはおやつ？」

相変わらぬ洞察力に恐れ入りますと、蘭子がこの場にいたら間違いないと言っていただろう。

とりあえずお弁当の入っている包みを拾い二人の後追いかけて学校へ向かった。

校内では雄二が、カオの結界から抜け出せず、迷子になっているはずだ。

由宇は二人にそれを告げなくてはと急ぐが一向に追いつかない。遠くで蘭子に殴られたのか、鼻血を噴出している健の哀れな姿が小さく見えていた。

第3章 儀式

「カオを送り込んでどれだけの時が悪戯に過ぎておるのだ、ラウムよ」

隣の世界の天空に浮かぶ宮殿の壁画が口を動かした。その声は宮殿全体を揺るがし恐ろしい咆哮をあげた。

「はい、ルシフェル様。カオにはあちらの世界の人間としてトリニティスター達の傍へ置き情報を集め、リリス様へ報告している次第であります」

幽伯魔ラウムは声の主の壁画に敬礼をする。

声の主は、大きな翼を三枚持ち、水牛の顔、手足の鉤爪はマンモスの牙のような姿で鍾乳洞の壁からギロリとラウムを睨み

「カオがインプなどを使って余計なことをしたために、五芒^{ペンタグラム}、六芒^{グラム}の力を甦らせたというではないか」

「はい、三人を別行動させて一番力の不安定であったクリムゾンの力がどの程度かと図ろうとしたのですが……申し訳ございません。しかし、おかげでリリス様へもしろいご報告ができたと信じております」

不敵な笑みを浮かべながら

「もう少しだけお時間を頂戴したいと存じます。幽夢魔リリス様のお力添えさえあればトリニティのやつらを内部から混乱させるのはたやすいであろう。ラウムよ、リリスへはわしが直接言付けておこう」

「ありがとうございます」

ラウムが深々と頭を下げるとルシフェルはただの壁画へと戻っていった。

「これでリリス様もうごくであろう……しかしカオめ、無駄に手

を出すなといっておいたのに、自らの正体が露見してしまつては何の意味もなくなつてしまつてはないか……。能力は高いのだが、少し向こう見ずなところがあるから困る」

ヤレヤレといった感じで頭を振り

「ではクロウよ、リリス様のところへ使いを頼む」

肩に乗せていたカラスの額に指を当てるとラウムの指先が妖しく光る。カオから送られてきたトリニティスターの情報をクロウと呼ばれたカラスへ伝えていた。

クロウは大きく羽ばたくと、ラウムの肩を離れ闇の彼方へ飛んでいった。

「これでよい。リリス様が動いてくだされば、カオも少しはおとなしくなるだろう」

ラウムはそう呟き、伝説の書、封印の書などが山積みされている宮殿内の書庫へと姿を消した。

「くしゅん」

真由がくしゃみをする。

「大丈夫ですか？風邪？？」

由宇が真由のおでこに自分のおでこをくっつけて熱が無いか確認する。

「ふあ、くしゅん！だ、誰かあたしの噂でもしてるのかも……くしゅん」

「そうかもしれないね、真由ちゃんつてば男子にすごい人気あるもんねー」

蘭子が、タコの形……みたいな……たぶんタコさんウイナーだろうものを箸に刺して真由の目の前でくるくる回しながら言う。

「そかな、なんか視線を感じるというか、睨まれてるというか、んー……人気とか関係ない視線を感じるんだけどな、授業で当てられそうな予感っていうのに近い感じだよ」

鼻を真つ赤にしながらサンドウィッチを頼張る真由。

「あーそれ、わかりますー」

かわいいお弁当箱に綺麗に盛り付けられたお弁当に箸をつけながら由宇。

屋上でいつものお昼の風景であつた。

「それにしたつて遅くない？男二人。お茶買いにいくのにどれだけ時間かかってんのよね」

綺麗な黒髪のロングヘアをツインテールにまとめその結び目に紫の小さくかわいいリボンを結っている喜多嶋蘭子は怒つたような瞳が本当に怒りに満ちてきているようだ。

「あたしのミルクまだかなー」

中学生かと間違ふほど小さく、金色に輝く髪をポニーテールにまとめ笑顔がとても愛らしい岡真由が牛乳を待ちわびながら、次のサンドウィッチに手を伸ばす。

「ミルク？あー、牛乳のことですね。きっと学食混んでてなかなか買えないんじゃないですかね」

小柄で少し茶色がかつた毛色で、ボブカット、おっとりとした雰囲気眼鏡の奥はウルウル瞳が小動物を連想させて可愛いらしい河野由宇が屋上の扉へ視線を送つた。

「おまたせー」

「おまたせしました」

由宇の送つた視線の先の扉から男二人が戻つてきた。

一人は浅見健。普通に普通すぎる外見でお調子者である。

もう一人は柴田雄二。ひよろつと長身であるが精悍で強面、目つきも鋭く一匹狼タイプであるが、いつかの事件の際には校内で何時間も迷子になり、由宇に見つけられたときには、抱きついて泣き出してしまつたのはみんなには内緒らしい。

「おそいわよ！のどがカラカラで干からびそうだったじゃない」

「慌てて飯食うから喉につまつたんだろ」

蘭子は健に箸を向け、ガルルルルと唸る。

こんないつもの屋上でのお昼休みであるのだが……。

岡真由は、吸血幽魔力才であり、柴田雄二は門番ミユウ、そして健達三人はトリニティストアーである。

力才の魔能力には幽玄界のにおいを消し、環境に溶け込み敵の懐に入り込むことができるのである。

人懐こい性格も手伝い、健達と仲良くなることに成功していた。力才自身、岡真由として高校生活をすっかり満喫しているようなのでラウムから何度も警告は受けているのだが……。

「ちゃんとやることやってんだからうるさいこといわないでよね、あたしだって好きでこんなことやってんじゃないんだから」

そんな風に、ラウムへは言うてはいるが、実際すっかり馴染んでいる。

とにもかくにも不自然な異世界仲良し五人組が出来上がっていたのである。そしてみんなの正体を知っているのは真由ただ一人であった。

「いいないいな、人間ってずるいくらいだな。こんなにおいしいご飯食べて、学校とか面白いし、テストとかはマジ嫌だけど。あっちじゃラウムのじっちゃんとかわいりりス様しかあたしの話相手っていなかったじゃん？」

小さく口ごもりながら健から牛乳パックを受け取る。

「え？なんか言った？」

「何も言ってないってば、それよりこのミルクどうやって飲むの？」

真由は手に取った牛乳パックを空にかざしたり下から覗いたりしながら首を傾げている。

「うそ！外国にはこういうのなかったのかな。ストローさしてあげるから、ちよつと貸してみて」

健は真由から牛乳パックを受け取ると慣れた手つきでストローを差し込む。

「なるほど……そうやって飲み口を差し込むのね。私の世界では

……」

「ん？世界……ですか？」

すかさず雄二が真由の言葉をさえぎった。

「あ、いや私の国ではってことですよー。ちよつと言葉まだ慣れてなくって」

あわわ、と両手で口元をおさえて修正をした。

「そうですよ、まだこっちにきたばかりなんだから虐めちゃダメですよ、雄二さん」

「そーよそーよー、あたしの真由ちゃんだからね！泣かせたら殺すわよ。それから由宇ちゃんはお嫁さんだから取っちゃダメ！」

由宇と真由の二人の背中から抱きつき、目が点になっている男二人を威嚇する。

「はいはい、取りませんよ。でもさ、蘭子が近くにいたら声もかけられないな。あーやだやだ小姑め」

やれやれとジェスチャー混じりにつぶやいた健。次の瞬間、頭から星がチカチカと飛び交い屋上で大の字になっていた……。

「殺すっていったでしょ！」

「あの……浅見君は蘭子さんへ言ったのであって二人をいじめたわけじゃ」

雄二は遠慮がちに突っ込みを入れると

「あんたも逝く？」

ガルルルルと威嚇しながら雄二を睨む蘭子。

「いえ、遠慮しておきます」

慌てて買ってきた炭酸飲料に手をつけお茶を濁す。

「くしゅん！ふぁ……くしゅん」

「ほんとに風邪でもひいたのかな、保健室行く？熱測ってもらったほうがいいんじゃない？」

真由のくしゃみはとまらない。

「お昼終わったら一緒に行くうね、連れてってあげるから」

「ふ、ふあい。あーそれ……」

蘭子は後ろから抱きついたまま、真由が手に持っていた食べかけのサンドウィッチをパクつと食べてしまった。

「あはは、食べちゃった。あたしのタコさんウィンナーあげるから」

「え？あれってタコさんだったんですか。てっきりロケットか何かかと思いました」

「な、タコさんよ。立派にタコだってばー。うう、ひどいよ、由宇ちゃん」

「ごめんなさい、つい」

「つい、何よ」

ガルルルと由宇をも威嚇する蘭子。ショックだったのか、ちよつとだけ涙目になっていた。

和やか？ないいつものお昼休み、空を見上げれば雲ひとつない気持ちのよい天気、大の字でのびていた健が目を開くと一箇所だけ黒い雲が浮かんでいる。

「なあ、なんであそこだけ雨雲あるんだ？変な天気だな」

「雨雲なんかどこにあるのよ、こんなに気持ち良い天気なのに」
蘭子が健の視線を追いかける。

「あ」

「え？」

「消えた」

「何よ、それ」

「だって消えたんだもん」

「あたしをかつぐつもりでしょ、エイヤー」

「ぐはっ」

大の字の健へエルボードロップ炸裂。大の字からくの字に体をよじりもがく健。

「イテテテ、本当だって、また出てきたし、見るよ」

「どれどれ」

蘭子、由宇、雄二、真由が一斉に空を見上げる。

「あれは……」

真由の顔が黒い雲を見た瞬間に青ざめる。

「どうしたの真由ちゃん。あの雲がどうかした？」

「んーん、な、なんでもない……急に気分が悪くなってきた。保健室、連れてって……早く、お願い」

青ざめた顔に汗がダラダラと流れ始め、緊張した顔で真由は蘭子にしがみつく。

「ちょ、わかった。大丈夫？今行くからね。みんな後片付けお願いね」

「ああ、真由ちゃん頼んだぞ。蘭」

蘭子は真由の肩を抱き、急いで屋上から出て行った。

「浅見君、由宇さん」

雄二の顔つきも真剣になり

「準備はいいですか」

「なんだよ、準備って」

「あの雲は、幽玄の手の者の仕業です」

「ひあ、本当ですか」

「はい、先ほどから気にはなっていたのですが、真由さんと蘭子さんがいたので黙っていました」

「真由ちゃんわかるけどさ、なんで蘭まで」

「蘭子さんは、まだ戦闘に出れないかもしれないと思ひまして」

「この間のインプの時の心の傷……」

由宇が健に小さな声で呟いた。

「そうです、あの時確かに蘭子さんは命を落とした。本人はどこまで記憶にあるかわかりませんが、負けたという事実だけは認識しているようです。そこに蘭子さんのあの攻撃的な性格……普段ならいいのですが、今は五芒星の力が暴走して制御できなくなるかもしれません」

「そっか、でも蘭なしじゃこれからどうすればいいんだ」

「それは浅見君、あなた次第ですよ」

「おれ？」

「そうです。あなた方の絆に期待するしかないですね」

「絆って言われても……」

健は困ったように由宇に助けを求める。

「……」

「私だって、浅見さんの事……でも、蘭子さんと争いたくないし、勝てるとも思えない。それにあの時の二人見てたら私なんか入る隙間これっぽっちもないし……」

由宇は今にも泣き出しそうな顔で俯き何も声に出せない。

雄二の顔が陰しくなる。

「あの雲の中にいるのはおそらくリリス。幽夢魔リリスです。インプのようには行きませんから気をつけてください」

「ああ」

「はい」

同時にうなずく二人。

「いつも申し訳ありませんが僕は、蘭子さん達の所へ向かいます」

「蘭を頼むぞ」

「はい」

屋上から雄二は姿を消した。

綺麗な青空の中に浮かぶ不自然な黒い雲、妖しく黒い光の筋を残しながら屋上へ近づいてくる。幽玄界の使途が現れるときには激しく耳障りなノイズとともに異空間に包み込まれるのだが、雲が近づいてきても何も変化がおきない。

「あれ、本当に敵なのかな」

由宇は口元に指を当てて首を傾げ、健の顔を覗き込んだ。

「あ、あ、ああ、雄二が言うんだからそうだと思うけど。少しいつもと違う雰囲気だね」

由宇の顔が接近したため、健の顔はタコのように真っ赤になる。

「でも、変身……しないんだけど。いつもみたいに身体の奥のほうからこみ上げてくる力みたいのがまるで感じないし」

「え、異空間じゃないとダメなんかな」

戸惑う二人へほとんど雲は近づいてくる。しかし不思議と焦りは感じない。間違いなく幽玄界の敵だという感覚はあるのだが戦意がまるでわきあがってこないのである。

とうとう雲は屋上から数mのところまでやってきた。その中から、痩身でロングヘアーに黒のチャイナドレスを身に纏った美しい女性が現れたのだ。

「あ、あ、あ、か、身体が」

「いやああ、うごけないよお」

硬直した二人の目の前へ、その女性は歩いて……浮遊してきた。

「はじめまして、アージエントにキュア……。ふふ、今はトリニティスターじゃなくて浅見君と河野さんですね。私はリリス。幽夢魔リリス」

「お前本当に幽玄界のリリスなのか」

もっとおどろおどろしい姿を想像していて拍子が抜けたせいか、恐怖や緊張感のない口調で問いかけた。

「今日はいつも力才がお世話になってるからみなさんにご挨拶だけでも思ってたんだけど、力才はいなくなってしまったのね」

「お世話？力才？何いってやがる。吸血幽魔力才なんか世話した覚えはないぜ」

「あら、そう。まあいいわ。近いうちにわかるでしょう。せつかくこうしてお会いできたのですからお土産くらいはおいていかないといけないわね」

そう言つと由宇の額に手をかざし、リリスの手は青白い光を発しはじめた。

「きやあ」

「何しやがる！やめろ！」

「いやあああああ。あ、浅見さん助けてー」

石化したかのように動くことのできない二人は、リリスにされるがままである。

青白い光は、由宇の額へ照射され、六芒星を浮き上がらせた。星が交差しながらものすごい速度で回転し、由宇の記憶と頭の中を激しくかき混ぜているかのようだ。

「いやああ、頭が、あ、頭が熱いよお……い、いや、ダメです。わ、私は、私の……あ、さ……みさ……ん」

「ふふ、これでキュアの心は改ざんされるのよ。トリニティスタ―の中でも重要な任を持つキュアが心ごと壊れていくんだ。あつはっはははは」

「やめろおおおお」

声も出すことができなくなった由宇は糸の切れた人形のようにドサッと崩れ落ち、意識を失った。

「死んだわけじゃないんだからあんまり騒がないでくれよ、アージェント。私は剣を持つことは苦手でね、そのかわりといっちゃなんだけどちよいとお前達の心で遊ばせてもらうことにするよ」

「な、なんだと。どういうことだ」

「すぐわかるさ。カオから届いた情報が確かなら、お前達三人の絆は音を立ててくずれていくだろうねー。くつくつく」

「絆……」

「そうさ、絆だよ。どんな茶番が繰り広げられるか楽しみだねー、それじゃあたしは失礼するよ」

フツと空中へ舞ったかと思うと次の瞬間にはリリスの姿は消えていた。

リリスが消えたが早いか、健は由宇の元へ駆け寄り肩を揺さぶる
「由宇ちゃん、由宇！大丈夫か。おきて」

「ん、んん……あの、あたしどうしてこんなところで。あ、浅見さん」

「よかった。リリスは逃げたからとりあえず大丈夫だよ。由宇ちゃんは平気？怪我はしてない？」

「はい、だいじょ……イタタちよつと頭がクラクラします」

ふらふらしながら立ち上がるうとするが、二、三步歩くとよろめいてしまう。

「蘭が真由ちゃんつれて保健室にいつてるから、由宇ちゃんも保健室で少し休もう」

「はい」

由宇の肩を抱きながら保健室へ向かう二人。その顔を耳まで赤く、いつものウルウルした瞳は健の方へ向けられている。

「浅見さんは……」

「ん？」

問いかけられ由宇へ視線を向けると、由宇は真剣な眼差しで健を見つめていた。

いつもはほんわかとおっとりした感じのする由宇であつたが、この時ばかりは別人のように健へ問いかける。

「浅見さんは、私のことどう思ってますか？ 蘭子さんといつも仲良くて楽しそうにしてて、二人がきつとお互いのこと好きなんだろうなっていうのは、いくら鈍感な私でもわかるんです……。でも私は……」

今にも泣き出しそうな顔で、健の腕にしがみつく。

由宇の胸が健の腕に押し付けられ、一瞬健の顔が緩んだ。

「え、あ、い、いや、あの、いきなり……。どうって言われてもさ、蘭とは中学時代から一緒だし、た、たまたま同じ高校の同じクラスになれただけで……」

そこまで言うと、健はうつむき言葉が続かない。これはどう考えても告白されようとしているシチュエーションだ。いままで告白なんかされたことが皆無だったけれど間違いない。

もしそうなら返事は決まっているはず。公園でのインプとの戦闘を思い出す健……。あの時の気持ちには偽りはない。この学校を受験したのだって、蘭子と同じ学校に通いたかったからだ。毎日力バンの殴られ、肘鉄をくらい、顔面にぐーがとんできて鼻血を吹こうと

も。

「あのさ、由宇ちゃん」

「はい」

由宇の視線に耐えられない健。

「と、とにかく今は保健室急がなくちゃ！ね、歩けないなら抱えていってあげるからさ」

「え、え、きゃあ」

健はひょいっと由宇を抱えあげた。いわゆるお姫様抱っこの形になった。由宇は健の首に手を回し顔を健の胸元へ埋めた。

「す、すいません。私重たくないですか」

「平気平気ー。それじゃ行くよ」

屋上から階段を駆け下り保健室へ急ぐ健。話題を上手くそらすことができてほっと安心したのもつかの間……。

保健室には蘭子、雄二、真由がいる。さて、この状況、どう説明できるのだろう。健は考えながら保健室へ向かっていった。

保健室の前では何人か人だかりができていて、中に入ろうとしたが保険医の先生に止められた。

「ごめんね、さつき具合が悪いつてきた子が急に錯乱して暴れるの。今、担任の先生と学年主任の先生を呼びに言ってるから具合が悪いのなら職員室へ来てくれる？」

と保険医の先生は健と由宇を促そうとした。

「あの……大丈夫です。それよりまさか……真由ちゃんじゃないですよ？中で暴れてるのって」

「そうかもしれない、先生！中にいるのって雄二と蘭と真由じゃないよね」

「そうよ、カナダからの転校生の岡さんよ。あとは同じクラスの子達、今二人が岡さんをなだめてくれてるはずんだけど……鍵がかかってるわけでもないのに扉が開かないのよ」

「蘭！おい、聞こえるか！開ける、開けてくれ」

必死の形相で扉を叩く健

「大丈夫ですよ、雄二さんもいるし、岡さんきつと慣れない環境で疲れが出てるだけです」

「え……でも扉が開かないって」

「私、まだ少し調子よくないみたいです。浅見さん、保健室使えないから、職員室まで連れて行ってください」

由宇は健の腕にしがみついていた。

「あ、ああ……そうだ由宇ちゃんも少し休まないといけなかったんだね。わかった、ここは二人に任せて行こう」

少し由宇の物言いが気になったものの、屋上でのことを思い出し、保健室を後にした。

「いやだー！怖いよ、助けて……ちゃんと言われたことやったじゃん。悪いことなんかしてないよ」

保健室では、気が触れたかのようにベッドの上で真由が泣きじゃくっていた。

「真由ちゃん、どうしたの？落ち着いて！ちゃんとお話聞いてあげるから、ね、だからお願い」

屋上で急に様子がおかしくなった真由を保健室まで連れてきたのは良いが、まるで手がつけられない。保険医の先生は保健室から追い出してしまうし、ベッドの上で意味のわからないことを叫び続けているのだ。

「私だつて、私だつて……」

錯乱する真由を抱きしめて落ち着かせようとする蘭子に

「触らないで！あなたなんかなんで帰ってきたのよ！私の邪魔しないでー！！」

ものすごい剣幕で蘭子を引き剥がそうとする。

「え……帰ってつて、真由ちゃんが連れて行ってつて言うから心配で一緒にここまで来たんじゃない。なのに邪魔って……」

真由の言葉に動揺した蘭子は、抱きしめていた力をふっと緩めたと、その時。

ぶおんつと空気が振動したかと思うと、蘭子は真由から磁石が反発するときのように勢いベッドからとばされ壁に激しくぶつかつた。

「蘭子さん！」

雄二が慌てて蘭子の下へ走る。

「いったーい、な、何今の？」

「まさか……」

雄二は『封印の書』をとりだし、真由の元へ駆け寄り頭上へかざした。

すると、『封印の書』が藍色に輝き、吸血幽魔力才のページを指し示した。

「蘭子さん、こいつはカオだ。気をつけてください」

「ちょ、何言ってるのよ雄二君、そんなわけないじゃない。この子は私たちの友達の岡真由ちゃんでしょ。一緒にクラスで一緒に宿題忘れて廊下に立たされて、一緒にお昼食べて……カラオケいったりプリシヨしたり……昨日だって来週の遠足での班で役割分担決めたし……」

事態を理解したくない蘭子は、真由の手をとろうと近づいた

「ダメです！近寄っちゃあぶない！」

「来るなー」

雄二が止めに入ったが間に合わず、再び蘭子は真由に弾き飛ばされた。

「きゃー」

再び壁に激突する。

「リリースさま……が、怖いよ、私また叱られる。何も悪いことしてないのに……」

泣きじゃくる真由、いや、雄二の『封印の書』によって吸血幽魔力才の姿を見せ始めていた。

「今のうちに、ここで封印をします」

封印の書が発光しながら宙を舞う、雄二は両手を広げて瞑想を始めた。

「我が名は門番ミユウ、天に広がる五芒の星よわれらが息吹を育む六芒地球よ、幽玄、現有表層の境を乱すものをここに封じ……」

「ダメー！ー！」

雄二が封印の儀式の為の呪文を唱えているところへ蘭子が突っ込んできた。

「な、なにを！危ない！！」

カオと雄二の間に割って入り、カオを抱きしめる蘭子、雄二の発動した呪文は、封印の書から光となってカオめがけ発していた。

「うぐっ……ダメだって……カオだろうと真由ちゃんだろうと私たちの友達だもん、話せば絶対わかってくれるんだから……」

蘭子の制服を焦がした光は、プスプスと音をたて背中に火傷を負わせてしまった。

「大丈夫ですか、蘭子さん」

慌てて術を解いた雄二は蘭子へ駆け寄る

「平気よ、これ位、こないだのインプにやられたときの方が痛かったし」

蘭子に抱きかかえられたカオは一瞬驚きの表情を見せたが、少し照れたように俯き

「なんで助けたのよ、あたしはあんた達を殺す為にここにいるんだから……今なら封印でもなんでもできるじゃない」

「なんでって私達友達でしょ、真由……ちゃんが誰だろうと私の友達なんだから助けるのは当たり前」

「馬鹿ね……そんな甘いこと言ってるからインプごときにやられるのよ」

「な……そんな」

カオは立ち上がり杖をふりかぶる

「死んじやいなさいクリムゾン」

そういうと振り上げた杖のさきに黄色い光が球状に集まり始めた。

「死んじゃえ……」

小さな声でそうつぶやくと杖を持つ手が振るえはじめ、光の玉が小さくなった、カオの瞳にはいっぱい涙をため、杖を落としがくつと膝をついた。

「クリムゾン、蘭ちゃん……あたし」

「真由ちゃん、大丈夫、私たちがきつとあなたのこと守ってあげるから、何も心配しなくていいからね」

「うん……でも、リリス様には勝てないよ、きつとみんな死んじやうよ」

蘭子にしがみつくと、またもや大きな声で鳴き始めた

「落ち着いて、私達三人が一丸となってリリスをとっちめてやるからね、大丈夫よ、だから安心して……」

「うえつく、ひつく、で、でも、リリス様はきつと……ひつく」

何を言おうとしているのか、泣きながらしゃべるので聞き取りにくいのだが、リリスの秘密を知っているのは間違いない、雄二と蘭子はカオの一言一句を聞き逃すまいと必死の形相で見つめていた。

「トリニティストアーは三人そろって……えぐつ、力発揮するのは……ひつくみんな知ってるもん、リリス様は三人バラバラにするはずだも……ん、インプにだってクリムゾン一人じゃかてなかったでしょ……リリス様あいてなら三人が五芒、六芒の力を合わせて対抗するしかないもん」

「ふーん、てことはさ、一人一人じゃよわっちってことかー私達」

蘭子が無気なく発した一言に、雄二の顔が一瞬にして青ざめる。

「どしたの？雄二君」

「カオ、君が取り乱したのはリリスが見ていたからだよね、僕もさつき屋上で怪しい雲に気配を感じていたんだ」

「そうだよ、あたしリリス様のこと怖くて……いつもお仕置きばっかりされてたから、みんなと仲良くご飯なんか食べてるところ見られたら、三日間は起き上がれないくらいの罰もらっちゃう……」

「え！？そんな……てことは、健と由宇ちゃん大丈夫かな」

蘭子も青ざめた表情になり力オを見つめると

「わからない……でも、アージェントとキュアは完全顕現体になれるはずだよ、蘭ちゃんのクリムゾンだけまだ完全顕現してないけど」

「そつか、でも心配だし、あたしも行ってくる」

勢いよく蘭子が教室を飛び出そうと立ち上がると、力オは蘭子の足にしがみついていた。

「私と……契約……」

「え？ 契約って？」

「蘭ちゃんはトリニティスターとしてまだまだ未熟なの、だから私と契約……今のままじゃリリス様には絶対勝てないから」

耳まで真っ赤になりながら力オは蘭子を見つめ、少し強い口調で語り始めた

「私は吸血幽魔の異名を持つ者、こつちの世界で言う吸血鬼なの」話の筋が見えてこない蘭子は自分の足にしがみついている力オを呆然と見つめている

一人雄二が腕を組み、宙に浮かんでいる『封印の書』で何かを調べていたが、あるページを見つけるとハッとした表情になり、力オを再び封印しようと構えた

「ま、まさか……蘭子さんを幽玄の僕にするつもりか」

「ちよつと雄二君！ 話くらい聞いてあげなさいよ！」

手をグーに握り締めて雄二に殴りかかるうとする蘭子

「あ、いや、しかし……力オの契約とは首筋を噛んで吸血することとで相手を使い魔として使役することこの本に書いてあるし……」

雄二は困った顔で蘭子に抗議しようとするが、ガルルルと蘭子に威嚇され萎縮した

「どういうこと？ 真由ちゃん、契約って何か意味のある行為なの？」

「うん」

蘭子はカオを自分の足下から保健室のベッドへすわらせると自分もカオの正面へ座った

「今ミユウが言ったみたいに首筋を噛んで吸血すれば私の僕になるの、でも私が左手の甲から吸血すると私が蘭ちゃんの使い魔になれる……蘭ちゃんが私のご主人様になる」

「忠誠を誓うキスみたいだね、そんなことができるんだ……」

「うん、でもね、今はリス様の使い魔として契約してるからその契約を解かなくっちゃいけないけど」

「それってどうすればいいの？」

蘭子に問われると、カオはまた泣き出しそうな表情で

「蘭ちゃん！ 絶対契約してくれる？」

「う、うん……」

カオはマントの中から細長い棒のような剣を取り出し、蘭子へ手渡した

「これで私の左胸を突き抜いて……」

「そんなことしたら死……」

青ざめた顔で蘭子は手渡された剣を床へ落としてしまった

カオがその剣を拾いながらも一度蘭子へ手渡そうとする

「私を一度殺すのよ」

「——！？」

カオの瞳は少し悲しそうであるが、その瞳の奥には死を迎えるものとは思えない輝きを放っていた。

第4章 仲間（前書き）

登場人物がそろそろわかりにくくなってるのかとも思いますので
このばを使って整理しておきます

浅見健〓アージェント 喜多島蘭子〓クリムゾン 河野由宇〓キュア
柴田雄二〓門番ミユウ 岡真由〓カオ

第4章 仲間

健と由宇は、保健室での喧騒に気づかず、職員室へ向かい階段を肩を並べて歩いていた、時折、由宇が健の肩へ頭を乗せたり甘えるような仕草を見せるのだが、健の頭の中はそれどころではないのである。

『由宇ちゃんはかわいいし、とっても優しくていい子だよ……それに大切な仲間だし、蘭子は粗暴で決していい子と呼べる代物ではないよな？ それに屋上での由宇ちゃん、あれは告られたって理解していいんだよな……』

と何度も何度も反芻してはしまりのないニヤけ顔になり周囲を見渡しては、ハツとつ我にかえるという百面相を繰り返していた。

「浅見さん」

職員室の前を素通りする寸前に由宇が呼び止められ我に返った。

「あ、ごめんごめん、ちよっと中のぞいて横になれるところ借りれるか聞きにいつてくるね」

慌てて由宇を振りほどき中へ入ろうとする健

「あの、もう大丈夫だと思います、せつかくここまで連れてきてもらって申し訳ないんですけど……私もう平気みたいだから、屋上もどりましょ」

「え、屋上？ 教室じゃなくて？」

「だって、もう授業はじまっちゃってるけど、屋上にみんなの荷物とか出しっぱなしになってるじゃないですか」

「ああ、ああ、そうだったね、リリスのせいで屋上に荷物を放り出したまんまだったね」

「はい……」

「じゃ、ちよっと保健室に寄って、蘭子たちと合流しよつかさっきの騒ぎも心配だし……」

何気なく、当たり前のように言ったのだが、ものすごい剣幕で由宇が叫んだ

「ダメです!」

「——え? ダメってなんで……」

「ダメなものはダメなんです! 浅見さんは私と二人で屋上へ行くんです!」

「でも、保健室は通り道だしさ」

「そんなに蘭子さんがいないといけないんですか? 私と二人じゃ行けないんですか……」

由宇の眼鏡の奥にのぞく瞳には涙があふれて今にも零れ落ちそうであつた。

「そ、そんなことはないけどさ」

「だったら……」

由宇は健へ向かい一歩、二歩と歩を詰めてきた

「だったら……私とここでキスしてください」

「え、えええ!? そんな、いきなりなんでそうなるんだ、そ、そりや由宇ちゃんはおかしいと思うし、なんでもできて優しくて勉強もできるし……でも好きとか告げたわけでもなくてあのあの」

両手をワタワタとふりながら動揺しまくる健に

「私じゃダメですか?」

と瞳を閉じて健へまた一歩近づいてくる

「ダメとかじゃなくて俺ら——ほら! トリニティスターだろ?

仲間じゃん? その絆ってかさ? そういつのいきなり壊しちゃ——

——あ!」

健の頭の中に屋上でのリリスの一言が蘇った。

『死んだわけじゃないんだからあんまり騒がないでくれよ、アージエント。私は剣を持つことは苦手だね、そのかわりといっちゃなだけでどちよいとお前達の心で遊ばせてもらうことにするよ』

『すぐわかるさ。カオから届いた情報が確かなら、お前達三人の絆は音を立ててくずれていくだろうね!。くっくっく』

——絆、心、茶番

「ねえ、由宇ちゃん」

「——？」

「さっきから気になってたんだけど、いつもと雰囲気違いすぎる」

「私は……」

由宇の額に『六芒星』ヘキサグラム』が浮かび上がり始め、周囲の景色が一変し、薄青色の異空間に包まれる

「そ、そんな…… 由宇ちゃん」

少し茶色がかった毛色のボブカットが光を放ち薄い蛍光色のブルーに輝き始め、肩には黒いマント、手にはタクトのような杖を持ち、キュアへと変化したのだ。

「私の僕になるのよエージェント……」

「くっ、俺が戦うのかよ、仲間だぞ！ くそ…… リリスめどこに隠れてやがるんだ」

異空間の中で健も、身の丈程の大剣、背には白銀のマントを背負い、エージェントへと変化を遂げた

「とりあえず、蘭子と合流しなきゃ話になんねーな」

由宇の杖から放たれる無数の光の弾の攻撃をよける
攻撃力はないもののこちらからの攻撃を躊躇せざる終えない状況に
歯噛みをするエージェント。

「くそー、どうすっかなー、保健室まで突っ走ってもキュアのスピ
ードにはかなわないだろうし……」

「ええい、このまんまじゃらちあかないな、足止めになるかどうか
…… うりゃああ」

大剣から激しく白銀の炎をふきだし炎の壁を作った
「きゃあー!!」

キュアは炎の勢いに吹き飛ばされ、50m程先の廊下の壁に激突した

「よし、いまのうちに！ 保健室までダッシュだ！」

蘭子と雄二のいる保健室へ向かいひたすら走るエージェント

その保健室で今何が起きているかさえも知らずに……

蘭子は力才から手渡された細長い剣を手に震えていた

「蘭子さん、目の前にいるのは吸血幽魔力才なんだ！ 岡真由さんじゃないんだ、蘭子さんができないのなら僕が封印を……」

雄二が封印の書を手に蘭子へ近づく

「ミュウ、お前は黙ってる！ クリムゾンとあたしの契約なんだから！」

力才は雄二に向かって一喝し、杖の先から怪しく光る縄をだし雄二を捕縛した。

「ぐ、何をする！」

「あたしの身体の中にはリリス様の血液が混ざってるんだ、それを取り除かない限り永遠にあたしたちは戦い続けなければいけないのよ……クリムゾン、あたしは一度あなたを殺したの、インプを使ってね、だからその仕返しだと思えばいいじゃない、だからお願い……」

そっぴいながら震える蘭子へ近づく力才

「で、でも……」

「そう、ならば仕方ないね、ちゃんと戦いましょう」

そっぴいと、周囲に薄桃色のオーラを張りめぐらせた、と同時に蘭子はクリムゾンへと変化した

「いつまでも震えてないでかかってきて、でないとこっちからいくよー」

力才は杖を振りかぶり薄桃色の気を集め、クリムゾンへ放射する

「きゃあ」

戦闘態勢に入っていないところへまともに食らってしまい天井まで弾き飛ばされる

「いったーい、やったわねー」

レイピアを小さくかまえ、力才へ放射状に攻撃をしながら間を詰めようとする

「ふ、甘いよー、そんなんじやまたインプにだってやられちゃうよ」
カオの動きは俊敏で、目にも留まらない速さとはまさにこのことだ
次の瞬間、ぴょんと飛び上がるとレイピアの上に立っている

「く、ちよつと、こらおりなさいよ！ 重たいでしょ！ って……
動かないし、これならどうだー、えいやー」

と叫ぶと、ばく転しながらカオの背中へ蹴りを入れる
「ぐっ」

レイピアの上から転げ落ちるカオ、クリムゾンはレイピアを手に取る
うとするが、宙に張り付いたまま動かない

「ちよつとー、あたしの武器返しなさいよ！ 取れないじゃない……
……ったくもう！」

「武器ならそこにあるじゃん、それ使つていいよ」

縛られ身動きの取れない雄二の横に、カオから手渡されていた細長い
剣が落ちていた、クリムゾンはそれを拾い上げると

「あつたまきたー！ 真由ちゃんだからって許さないからねっ」
ガルルルと威嚇する

「やつといつもの蘭ちゃんに戻ったね」

小さくつぶやき、保健室の扉を背にクリムゾンと対峙する。

「何言つてんのよ、あたしはいつだってあたしなんだから、扉から
逃げようとしたってそうはいかないんだからね」

ジリジリと剣先を向け間を詰めていく……

「まっすぐ突こうとするからよけられちゃうんだよ…… もっと相手の
動きを読んでフェイクの攻撃とか間に入れて相手を誘い込まなきゃ
あたらなないよーだ」

「うっさい！ すばしっこいんだから、少し止まってなさい」

「どっかにリリスが隠れてるはずだ、それにはもっと広いところへ
誘導しなくちゃダメだな」

アージエントは走りながらどうやってこの事態を乗り切ろうかと考

えていた。

「とにかく蘭子と雄二と合流して屋上へ由宇ちゃんを誘い込んで……雄二にはリリスの居場所を探してもらえばいいかな」

保健室への道のりが遠く感じる、キュアのオーラの色——薄青色の空間はまっすぐアージエントへ向かって来る、ということは的確にアージエントの後を追いかけてきていることに他ならない。

授業中のおかげで廊下には誰もいないがいつだれか出てくるとも限らない、もし誰かに見られたらと思うと気が気ではないのだが、今はそんなことを考えてる場合ではないのだ。

三回の職員室から一階まで階段をすべるように走り、音楽講堂と購買をぬける、音楽講堂では合唱コンテストの練習をしている声が響き渡り、購買では売れ残ったパンやおにぎりを片付けるおばちゃんの背中がチラツとみえた

「やべー、誰かに見られたらどう言えばいいんだろ」

振り返るとキュアのオーラが階段をおりきったところまでやってきていた

「ずっりーぞ！俺飛べない仕様なんだからさー、ってかキュア飛んでるっしょー！！」

下駄箱を通り抜け、視聴覚室を抜け、プールの更衣室入り口をぬけ——目の前にあるはずの保健室から薄桃色のオーラが見えている

「——え！なんで！？まさかりリスが」

走る速度のギアを一段上げて……というか限界なのだがとにかく急いで扉の前に立ち考えるアージエント

「ここで由宇ちゃんを迎え撃って、保健室は蘭子に任せる？でもリリスだったら一人じゃ危ないし……扉を破って蘭子と二人対由宇ちゃんとリリス……ここまで来たんだ合流だ」

覚悟を決めると力強く扉へ向かって突進する。

『ドンっ』

大きく扉を弾き飛ばした瞬間

「うぐっ……」

「きゃあああああ」

小さな悲鳴と大きな悲鳴が交錯して聞こえた

アージエントの目には顔面蒼白のクリームゾンが鮮血を全身に浴びて呆然と立っている姿が映った

蘭子の両手にはカオから手渡された剣、ストローのように芯のない槍状の剣である、その剣の先には『小さな金髪の魔導士（吸血幽魔カオ）』が胸を突かれ、剣を通して大量の血液を噴出させていた

――扉と一緒に『小さな金髪の魔道士』がアージエントに弾き飛ばされ、蘭子の構える剣に突き刺さったのだ。

「ら、蘭ちゃ……ク、クリームゾンの勝ちだね」

口から血を吐きながら、微かに笑みを浮かべた。

「あ、あ、あ……真由ちゃん……あ、あたしが……」

激しく動揺するクリームゾン

「え！？ 真由ちゃん！！ だ、だって、ここは異空間になってるじゃないか、一体どうなってるんだよ」

雄二は縛られ床に倒れ、戦闘したかの様に部屋は散乱している、レイピアは宙に浮いていてクリームゾンは自分の武器ではないが剣を握り、敵と思しき者の胸を突き刺している。

アージエントの目には『小さな金髪の魔道士』とクリームゾンの戦闘が今まさに終結しようとしている様にしか見えない。

しかし、勝った筈のクリームゾンは取り乱し、やられた筈の敵と思しき『金髪の魔道士』は優しく微笑んでいる……。

『小さな金髪の魔道士』は小さな声で、しかし威厳を保とうとしながら語りだした。

「あたしは、吸血幽魔力オ、岡真由の名前で前たち近づく、亡き者するべく、幽大魔ルシフェル様の厳命の元、リリース様の使い魔として仕えて来た」

「な、それじゃ……」

クリームゾンの手から優しく剣の呪縛を解き放ち、自分の血を浴び、呆然と立ち尽くすクリームゾンの足元に跪く、次に発する言葉は、健

——アージェントもよく知るクラスメートの声色だった。

「みんなと一緒に授業つけて、宿題忘れて蘭ちゃんと廊下に立たされて、みんなと一緒にご飯食べて……テストはマジ嫌だったけど……この世界でこんなに幸せな時間が過ごせるなんておもわなかったんだよ、あたしはここがいい、蘭ちゃん達と一緒にがいい」

「それならここで一緒に過ごせばよかったじゃないか、何も戦わなくても……」

「そうだよ、でもさ……戦いたくなくてもあたしはリリス様の使い魔、命令があれば動かなくっちゃいけないんだよ、いつ、トリニティスターを殺そうとするかあたしにもわからないの……だから、あたしは蘭ちゃんに殺してってお願いしたの、でも聞いてくれなかった」

「それで、こんな戦闘に……」

「うん、でも蘭ちゃん、クリムゾンはまだまだ弱い、星の力もらってないでしょ、アージェントの健君とキュアの由宇ちゃんはあたしのインプと戦うときに五芒、六芒の力を授かってるから……」

「おい、あまりしゃべるな！ 本当に死んじまうぞ！ 胸の剣早く抜いて手当てを……」

「う、うん……でももう少しでリリス様の血液の結晶があたしから出て行くから、あたしは吸血幽魔、使い魔になるか僕^{しも}を作るかしか生き残る道はないの、蘭ちゃんが強くなるためにあたしの力を使つて欲しいんだ、だから蘭ちゃんと契約する約束……うぐっ」

カオの胸に突き刺さる剣の先からピンクに輝く結晶が転がり出た。

「これで、あたしを縛るものはいなくなったわ……」

するとカオは胸の剣を抜き、蘭子——クリムゾンへ向かい

「わが主、クリムゾン、願わくばあなた様の命の源たる聖をわが愚身に分け与え給え、そしてわが主に更なる栄華を——」

カオはクリムゾンの左手を頂くと忠誠のキスをするように吸血し始めた。

クリムゾンの真紅のオーラが輝きだす、カオも以前の薄桃色のオー

ラからクリムゾンと同じ赤いオーラを発し始めた

「蘭ちゃん」

「あ、あれ？ 真由ちゃん？ あたしてつきり殺しちゃったのかと……」

「うん、死んだよ」

「——え！？」

「リリスの使い魔の吸血幽魔力才はクリムゾンに殺されて、ここにいるあたしはクリムゾンの使い魔、吸血……んー？ 幽魔はやだなー、なんか考えてよーご主人様」

「ご、ごしゅじんさまああ？？？ なにそれ？ どしてあたしがご、ご、ご、」

「ご主人様だもん」

つい、今しがたここで起きていたことが嘘のように二人とも明るく、そして無事に『契約』は終了した。

「ああ！！ 忘れてた！！ 由宇ちゃんが……」

突然、アージエントが叫んだ

「由宇ちゃんがどうかしたの？」

きょんとした顔でクリムゾンが振り返ると、保健室全体を薄青色のオーラが包み、由宇——キュアが仲間であるはずのアージエント、クリムゾンに向かって杖を振るおうとしていた

第5章 リリス（前書き）

クリムゾンとカオの契約成立！

そしてリリスとの対決を迎える…

が、しかし、思いもよらぬ事態が待っている

第5章 リリス

キュア（由宇）は、杖をふりかぶると額のヘキサグラムが青白く光り杖の先から光の玉がクリムゾン（蘭子）を弾き飛ばした

「きゃー！！」

「蘭！」

「蘭ちゃん！！」

健と力才は同時に叫ぶ

「次はおまえ達の番だ……」

咄くと、キュアは糸の切れた操り人形のように『ドサ』っとくずれ落ちた

「――！？」

アージェントがキュアの元にかけよる

「由宇ちゃん、しっかりして」

肩をつかみ激しく揺さぶるが反応がない

「くそ、リリスめ！ どこにかくれてやがる」

周囲を見渡すが気配を感じない

「なんでキュアが私を……」

クリムゾンは今にも泣き出しそうな顔で倒れているキュアに近づく

「さつき屋上でさ、リリスのやつになんかされたみたいなんだよ、

キュアの額に浮き上がるヘキサグラムあるだろ？ あれを無理やり

浮き上がらせて『ねじれの記憶を埋め込んだ』って……リリスがいつてた」

「なるほどねーリリス様らしいやりかた」

と言うと、ぴょんと机の上に飛び跳ねる力才

「どういうこと？」

「蘭ちゃんと契約するって言ったときに言った事覚えてる？ 三人の力とペンタグラムとヘキサグラムの力を合わせないとリリス様には勝てないって、それを防ぐには、三人の絆を壊すのが一番簡単っ

てこと」

「うん、でも、なんでキュアを狙ったんだろキュアは攻撃型じゃないじゃん……私だったらアージェントを操って私やキュアと戦わせようと思うけど？ その方が一人でも倒しちゃうかもしれないじゃん」

「そうだな」

身動きしないキュアを心配そうに見つめながらクリムゾンとアージェントはカオの話に耳を傾ける

「それはね……」

カオは机の上からベッドの上、ベッドの上からアージェントの頭の上にぴょんつと飛び乗った

「ちょ、どこ乗ってるんだよ！ 降りろこら！」

アージェントは必死に頭の上のカオを下ろそうとするが、トランポリンにでも乗っているようにヒラヒラと捕まえることができない

「ちょっとだけ寝ててね、乙女の話だから」

というと、カオは思い切りアージェントの後頭部をサッカーゴールにシュートでもするように見事に蹴飛ばした

「——いて！」

次の瞬間、アージェントはキュアの横に情けなく寝転んだ

「ちょ、カオちゃん乱暴な——私も人のことは言えないけどさ……」
さすがのクリムゾンも少々慌て気味にカオにつぶやいた

「気がついてるかわからないけどさ、キュア、由宇ちゃんと、クリムゾン、蘭ちゃん二人の想いがアージェントにあるからね、だから操りやすいってわけ。あの屋上で蘭ちゃんはあたしと一緒に移動したでしょ、あたしは敵だったわけだから狙いやすいはずなんだけど、すぐ雄二がこっちにきたから矛先がキュアへむいたってとこじゃないかな」

「そか、キュアも……やっぱりそうなんだ……」

「なんでこんな男がいいんだろね」

カオは両膝を抱えて座り込むと、地べたに寝転がるアージェントを

指でツンツンとつつく

「そ、そんなこと言っただって仕方ないでしょ！　ってちが、私はこいつのことこれっぽっちも好きとかじゃー！！」

「かわいい、あわてちゃってー」

カオにからかわれ必死に両手を振って否定しようとする……その時
「――！？」

一瞬にして周囲の空気が変わった

「きたね」

「え？　まさか」

「うん、そのまさかのリリース様。二人は伸びちゃってるけど、あたしとクリムゾン、新しいご主人様との初陣だよ」

「ご、ご主人様って……と、とにかくどうしよう勝てるかな」

不安げにクリムゾンは武器を握りなおす

ピンクのめやが段々と近づきめやの中心から妖しくそして美しいリリースが顕れた

その表情は険しく、しかし、微笑みさえ浮かべているようにも見える
さすがのカオにも緊張の色がみられた

「ふふ、久しぶりだね、カオや。しばらく報告が来ないと思っていたらなにかい？　私の聖なる結晶を吐き出したみたいじゃないか」

リリースのオーラがあたりを包み込む

さほど広くない保健室、しかし空間を支配したリリースによって何十倍もの広さを感じる。

周囲にある四台のベッドも、保険医の使っている机も椅子も衝立もガタガタと震えている……まるでリリースに恐怖しているかのようだ。
カオはクリムゾンの炎を受けた杖をリリースへ向け、気丈にも叫ぶ。
「もう、あたしはおまえのファミリア（使い魔）じゃない！　ここに
いるクリムゾンがあたしのご主人様なの！　だからおまえを……
退治する！」

「そっ……やって御覧なさい、カオごときに私が倒せるとおもっているのかしら」

そついうと両手を広げ、大きく息をはきだした。

「はあああつ！」

四方に広がったモヤが巨人の腕に形状を変え、力才をたやすく捕らえ、そしてつるし上げた。

「ぐ、うぐぐ……く、くるしい」

2本の巨人の腕は容赦なく小さな力才の体を壁に貼り付け、もう2本の腕は力才めがけてなぐりかかる。

「おーほほほ、私に逆らうとどうなるか、力才、お前が一番知っているはず。苦しいだろう、せめて早く楽にしてあげるよ」
凍りつきそうな微笑を浮かべながらリリースが言った。

力才はなされるがまま殴られ続け、口からは血を流し、意識もすでに朦朧としてきていた。

動きを封じられ、手出しすることもかなわずに……。

「た、たすけて……ご主人様」

力才の瞳は光を失いそうになりながらも、新しい主、クリムゾンへ向けている。

「やめなさい……やめてー！！」

その時、クリムゾンが吼えた

真紅のオーラを身に包み手に持つレイピアからは真っ赤に輝く炎が噴出している。

クリムゾンは、真紅の炎に包まれたレイピアを、巨人の腕に向けてと剣から渦巻状になりながら炎が噴出し、巨人の腕を焼き尽くした。

貼り付けにされていた力才は開放され、クリムゾンの足元にペタンとすわりこんでクリムゾンへ視線を向けた。

「あ……ああ、い、いやああああああ！！」

突然、叫びだしガクガクと震えだしたかと思うと、剣を放り投げってしまった。

クリムゾンの変身が解け、制服姿の蘭子へともどっている。

「こわい……こわいよ……」

顔面蒼白になりながら蘭子は呆然と立ち尽くしている。

「ふふふ、カオやお前が勝手にしでかしてかした事だったけれど、お前の情けない魑魅魍魎インプごときでこんなに大きな穴を開けることができるでいたんだね」

「——え！？ そんな」

カオは激しく動揺する。

確かに公園での戦いはカオのけしかけたインプ達によりクリームゾンを倒した。

そのことでここまで蘭子の心に傷を負わせていたとは気づいていなかったのだ。

リリスは静かに蘭子の元へ歩み寄り、手のひら蘭子の頭へかざし光を放つと、蘭子の記憶と心の叫びが映画のスクリーンのように映し出された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8742/>

トリニティ スター

2011年5月31日00時11分発行